

高 島 遺 跡

福岡県八女市大字津江字高島所在遺跡の調査報告

八女市文化財調査報告書 第52集

1998

八女市教育委員会

序

今回調査を実施した津江地区は隣接する馬場地区とともに国道3号線と国道442号線の交差する交通の要所で、最近になって開発が急速に進み、大型店舗等の建設が相次いで行われています。これに伴ってこの地区における埋蔵文化財の発掘調査も増加し貴重な文化財の発見も多数に上っているところです。今回の調査は老人保健施設の建設に伴うもので施設建設前に発掘調査を実施したものです。発掘調査の実施にあたりまして、株式会社高島ビル 代表取締役 川崎康子様におかれましては、文化財保護のため終始協力いただきました。記してお礼申し上げます。

平成10年3月31日

八女市教育委員会

教育長 樋口 欽一

例言

1. 本書は八女市教育委員会が株式会社 高島ビル 代表取締役 川崎康子の委託を受けて実施した福岡県八女市大字津江字高島所在、高島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 高島遺跡の現場における発掘調査は平成8年度に実施し、平成9年度は整理作業と報告書の作成を八女市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測は参加者で行い、現場写真は赤崎が撮影した。
4. 出土した遺物については、岩戸山歴史資料館で整理を行い、保管している。
5. 本書の執筆、編集は赤崎が行った。

本文目次

1. はじめに.....	1
2. 位置と環境.....	2
3. 発掘調査の概要と経過.....	4
4. 遺構と遺物.....	6
5. まとめ.....	85

1. はじめに

高島遺跡は福岡県八女市大字津江字高島511番地ほか3筆に所在する。

調査の発端は、医療法人社団慶仁会 川崎病院が、当該地5,505㎡に老人保健施設を建設する計画がなされたことによる。平成8年2月に行った試掘調査によって、弥生時代を中心とした集落や、多量の土器を含んだ包含層が発見された。このため建物の建設に先だって発掘調査が必要の旨の回答を行った。その後、両者が協議を重ねた結果、建物部分以外は1m以上の盛土がなされる事から、発掘調査は建物によって掘削される約3,500㎡のみを実施する事とし、平成8年4月1日付けで医療法人社団 慶仁会 川崎病院 理事長川崎正章氏より発掘届が提出された。発掘届の提出により平成8年6月19日付けで「埋蔵文化財発掘委託契約書」及び平成9年度で実施する「埋蔵文化財整理調査及び報告書作成委託契約」の協定書を締結した。

発掘調査は平成8年6月19日に開始、梅雨時期と、低湿地という悪条件での調査となったが、平成8年9月30日調査は終了した。発掘調査に引き続いて平成9年度には平成9年4月5日付けで「埋蔵文化財整理調査及び報告書作成委託契約書」を締結し、整理と報告書作成を実施した。調査期間中、医療法人社団慶仁会 川崎病院の皆様方には終始ご協力をいただき感謝申し上げます。

調査関係者は次のとおりである

医療法人社団慶仁会	川崎病院	
	理事長	川崎 正章
株式会社 高島ビル	代表取締役	川崎 康子

平成8年度	八女市教育委員会	
	教育長	樋口 欽一（3月から）
		小川 勲（2月まで）
	生涯学習課長	杉山 信行
	生涯学習課長補佐	
	兼文化財係主任	下川文比古
	文化財係長	赤崎 敏男（調査担当）
	同係員	中川 寿賀子
	同係員	大塚 恵治
	同嘱託	山田 朗子

平成9年度	八女市教育委員会	
	教育長	樋口 欽一
	教育部長	井上 幸治
	生涯学習課長	杉山 信行
	生涯学習課参事	森 和良（10月31日まで）
	生涯学習課長補佐	下川文比古
	兼社会教育係主任	
	文化財係長	赤崎 敏男（調査担当）
	同係員	中川寿賀子
	同係員	大塚 恵治
	同嘱託	山田 朗子

2. 位置と環境

高島遺跡は、矢部川によって形成された、ほぼ東西にのびる標高約35m前後の低位の段丘上にある。遺跡のすぐ北側には国道442号線が東西に走り、国道の両側に店舗や工場が多く建設されている。これら開発に伴って埋蔵文化財の発掘調査も増加しており、平成2年から高島遺跡周辺での発掘調査は、4カ所を実施している。

周辺の遺跡を概観すると、弥生時代の遺跡として西側に隣接する熊野遺跡があり、平成3年から4年にかけての第一次調査で、弥生時代を中心とした竪穴住居、貯蔵穴、溝、環濠、墳墓群が、古墳時代では竪穴式石室を主体部とする古墳と、竪穴住居が発見されている。平成8年の第2次調査では旧河川の一部のみ調査を実施したが、多量の土器が出土している。国道442号を隔てて北西側400mにある赤氏遺跡からも平成2年の調査で、弥生時代の竪穴住居、掘立柱建物などが発見されている。高島遺跡の北側一帯からは、平成6年から始まった八女東部地区圃場整備事業に伴う発掘調査で、弥生時代から古墳時代、歴史時代の遺跡が数多く発見された。特に平成6年度の調査で平田・六反田遺跡、北ノ前遺跡、野内遺跡から弥生時代の竪穴住居群、掘立柱建物群、墳墓群、古墳時代の豪族居館、竪穴住居群が発見され、さらに、平成7年度には北側500mの西原遺跡から甕棺墓9基と弥生時代、古墳時代の竪穴住居が発見された。平成8年度には西原遺跡第2次調査で弥生時代の甕棺墓74基、古墳時代の方形周溝墓3基、弥生時代から古墳時代の竪穴住居66軒が発見されている。



第1図 高島遺跡発掘前〔北東より〕



- 1.岩戸山古墳 2.乗場古墳 3.辻の西遺跡 4.宅間田古墳群 5.善藏塚古墳 6.丸山塚古墳 7.茶臼塚古墳 8.鶴見山古墳
- 9.鶴見山南・太神宮古墳 10~14.釘崎古墳群 15.一念寺古墳群 16.鹿子島山古墳群 17.本古墳群 18.立山山古墳群
- 19.丸山古墳 20.牛焼谷古墳群 21.立山山城輪廓跡 22.長峰地区条里 23.吉田地区条里 24.道手遺跡 25.福島高校遺跡
- 26.宅間田遺跡 27.福島城跡 28.福島中学校校庭遺跡 29.本向野遺跡 30.鈍土羅石棺・本町遺跡 31.赤氏遺跡 32.万上田遺跡
- 33.南中学校庭遺跡 34.熊野遺跡 35.萬島遺跡 36.後ノ江遺跡 37.鍛冶屋遺跡 38.津ノ江遺跡 39.折神院遺跡
- 40.高野町遺跡 41.松本遺跡 42.島田遺跡・長田遺跡 43.アモメ遺跡 44.茶ノ木ノ本遺跡 45.圓伏遺跡 46.平田・六反田遺跡
- 47.北ノ前遺跡 48.野内遺跡 49.餅田遺跡 50.枕林遺跡 51.丁ノ坪遺跡 52.永尾遺跡 53.千松遺跡 54.尺取遺跡
- 56.大門遺跡 57.石仏遺跡 58.大林遺跡 59.十郎丸遺跡 60.野ノ内遺跡 61.春田遺跡 62.西原遺跡 63.柳ノ内遺跡
- 64.八反田遺跡

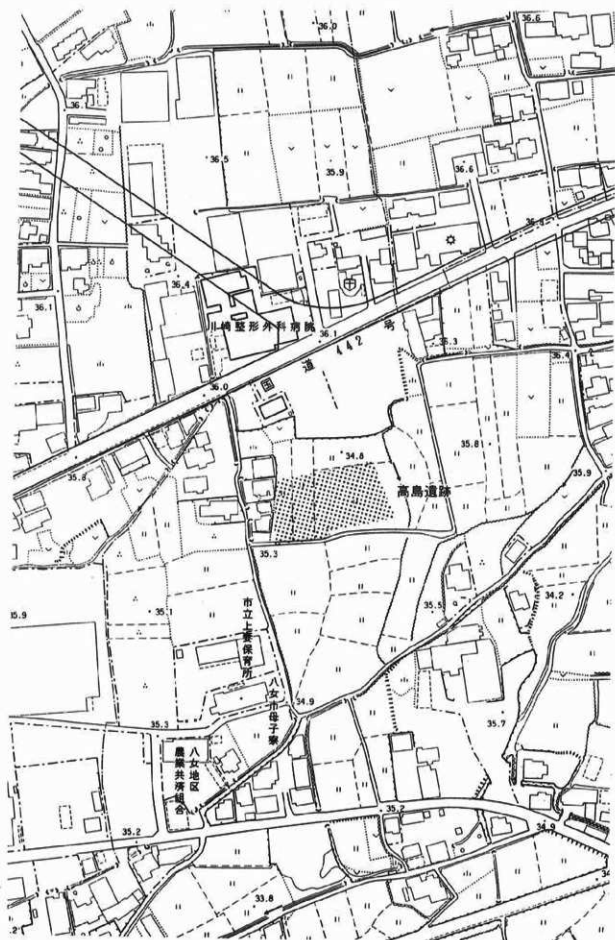
第2図 高島遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25000)

3. 発掘調査の概要と経過

調査は、5,505㎡の敷地部分の内、建物が建設される約3,500㎡を対象に実施した。遺構面までの土をバックホーで除去した後、ベルトコンベアーを用いて遺構の掘り下げを行った。しかし、調査を6月に開始したため、梅雨時期と、周囲が水田という悪条件、また、調査の遺構が自然流路であったため湧水が多く、冠水を繰り返しながら9月30日に終了した。調査の結果、北西から南東に流れる自然流路（旧河川）と、自然流路（旧河川）の西側を中心に竪穴住居、土塼、溝が検出され、特に自然流路から弥生時代の土器と石器が多量に出土した。

1. 調査経過

- 平成8年7月 8日 南北溝の調査を開始する。各現場より器材を運搬し、一部手作業で掘削の結果、多量の土器が出土する。
- 7月 9日 掘削の結果、多量の土器が出土する。堆積の土量が多く、ベルトコンベアーを入れることにする。
- 7月12日 基準点を設置する。基準点より15mの方眼区を設定し、さらに3mの小地区杭を打つ。南側の溝、土塼を掘り下げる。
- 7月15日 旧河川の黒色土を掘り下げる。黒色土中より多量の弥生時代の遺物が出土する。
- 7月22日 旧河川の中を掘り下げる。相変わらず黒色土中より多量の遺物の出土が多い。石剣が出土。
- 7月24日 旧河川の中を掘り下げる。相変わらず黒色土中より多量の遺物の出土が多い。西側に河原石の石列を検出、いずれも使用した痕跡のある石を用いている。午後より写真撮影を行う。その後、実測のため、基準点を設置し、近くより水準点を移動する。
- 8月 1日 旧河川の中を掘り下げる。相変わらず黒色土中より多量の遺物の出土が多い。しかし、旧河川の中心から東側の遺物の出土は少なくなる。大型蛤刃石斧、石庵丁出土。
- 8月13日 旧河川の中を掘り下げる。相変わらず黒色土中より多量の遺物の出土が多い。土器のほか砥石、挟入石斧、石庵丁出土。
- 8月26日 旧河川の中の黒色土を掘り下げをほぼ終了する。土塼を掘り下げる
- 8月30日 北側の柱穴、土塼を掘り下げる。石庵丁出土。
- 9月 7日 西側の柱穴、土塼の写真撮影。旧河川の下層を掘り下げる。石庵丁、大型石庵丁、石戈出土。
- 9月20日 旧河川の下層を掘り下げる。西側の実測を続ける。
- 9月25日 旧河川の下層を掘り下げる。挟入石斧出土。西側の実測を続ける一方、全体の平面図を作成する。



第3図 高島遺跡調査位置図 (1/2500)

9月30日、本日で調査を終了する。器材をかたづけ、多量の遺物とともに資料館に運搬する。

4. 遺構と遺物

1. 遺構

調査は、建物が建築される敷地の南側を中心に実施した。調査の結果、検出されたのは弥生時代中期の竪穴住居4軒、土壇3基、溝（旧河川）1条、多数の柱穴、古墳時代の溝3条である。遺構のほとんどは調査区の北から南に延びる溝の西側で検出され、溝の東側では遺構は検出されなかった。また、各遺構から出土する遺物は $X = +23,460.000$ $Y = -39,297.000$ を基点として、一辺3mの方眼を組み、北から南に向かってアルファベット、東側から西に向かって算用数字を用い、アルファベットと算用数字を組み合わせて地区の設定を行い、遺物の取り上げを行った。

竪穴住居（第5～9図）

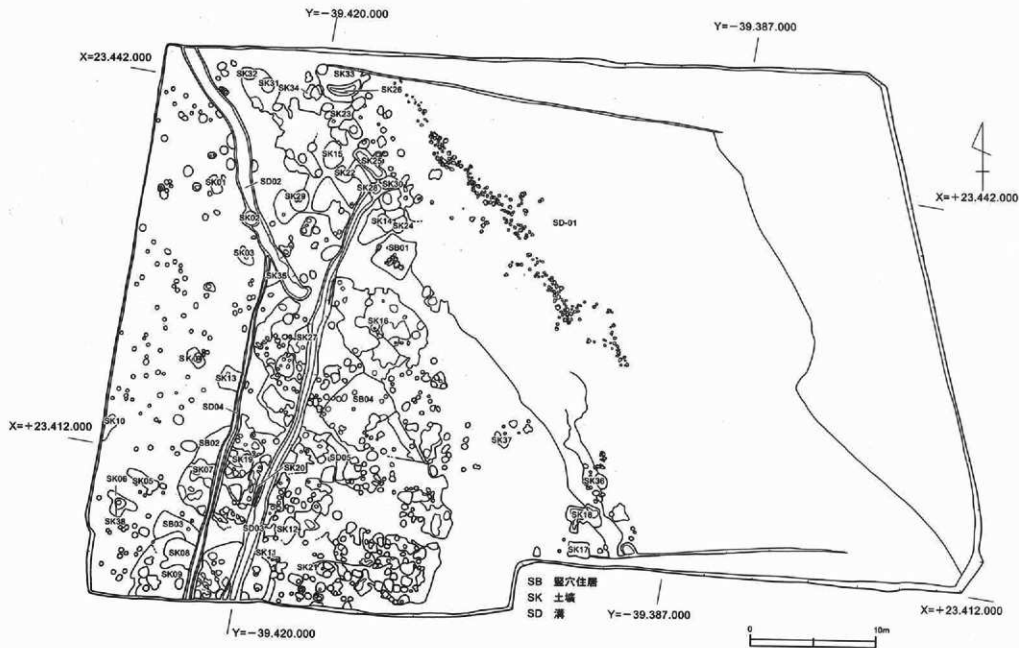
竪穴住居は調査区の西側と北側で4軒検出した。いずれも削平や攪乱によって残りが悪かったが、SB04からは多くの遺物が出土した。

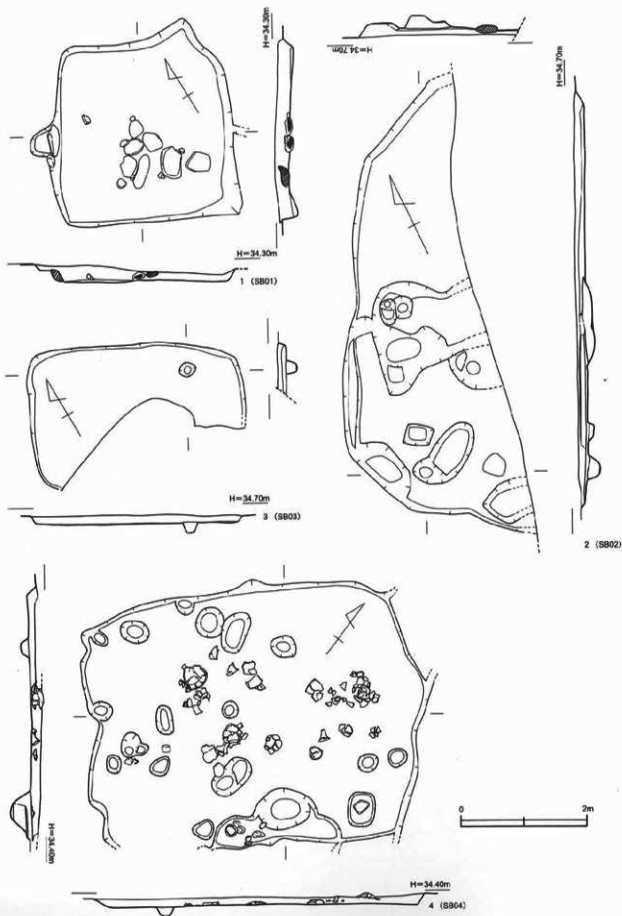
SB01（1）SD01の岸付近につくられている。一辺が3.2m×2.9mでほぼ正方形の小型の竪穴住居と思われる。床面まで壁は15cm前後とよく残っており、床面はほぼ平坦で、柱穴は無い。出土遺物として、甕形土器、高杯が、石器として大型の白石が多数出土している。

SB02（2）SD03.04をはじめ攪乱を多く受けており、不明な点が多いが一辺が6.8m以上の竪穴住居と思われる。床面まで壁は5cm程度しか残っていない。床面はほぼ平坦で、攪乱が多いため柱穴は不明である。出土遺物として甕形土器、鉢形土器、器台が出土している。

SB03（3）調査区の南西隅でSK08に切られている。一辺が3.4m×2.2mで隅丸長方形の小型の竪穴住居と思われる。床面まで壁は15cm程度しか残っていない。床面はほぼ平坦で、柱穴はない。出土遺物として甕形土器、小型土器が出土している。

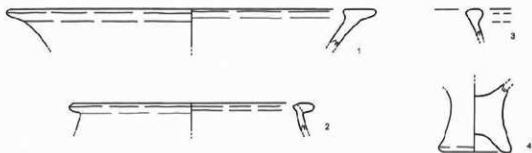
SB04（4）調査区の中程より発見。5.5m×4.0m、ほぼ長方形の竪穴住居である。残りは良く、床面まで壁は5cmから15cm程度残っている。床面はほぼ平坦で、Pitは多くあるが柱穴としてまとまるものはない。南側壁に接してやや大型のPitがつくられるが性格は不明である。出土遺物は竪穴住居の中央床面に集中しており、甕形土器、無頸甕形土器と鉢形土器、器台など土器が多く出土したほか、石器として砥石、石斧、石鏃が多く出土している。



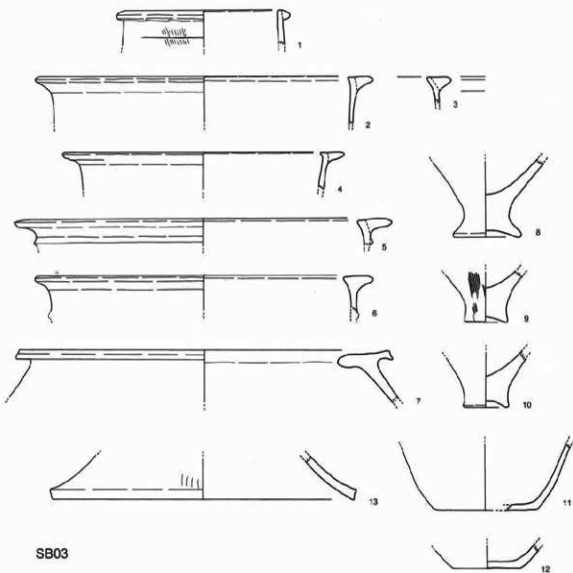


第5図 竪穴住居 (SB01~04) [1/60]

SB01



SB02

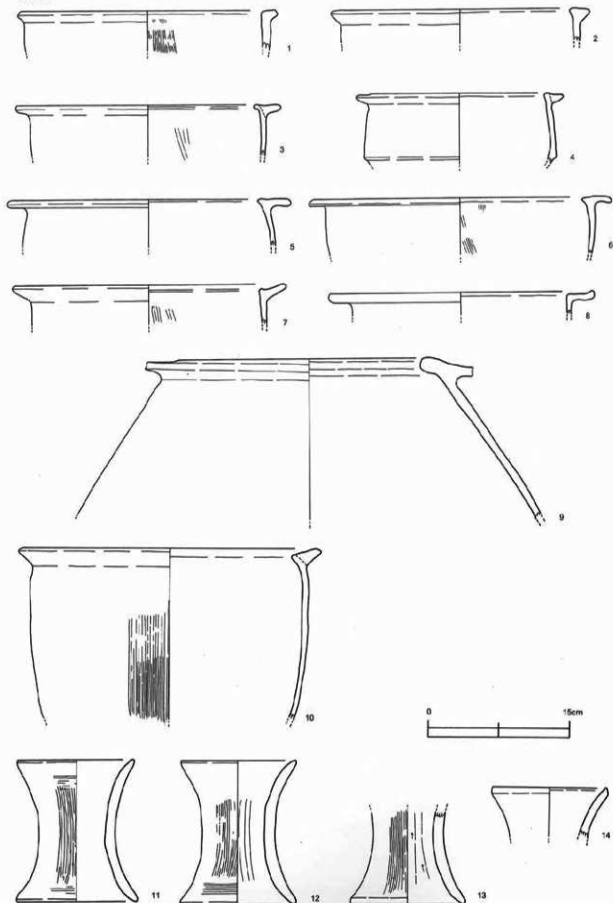


SB03



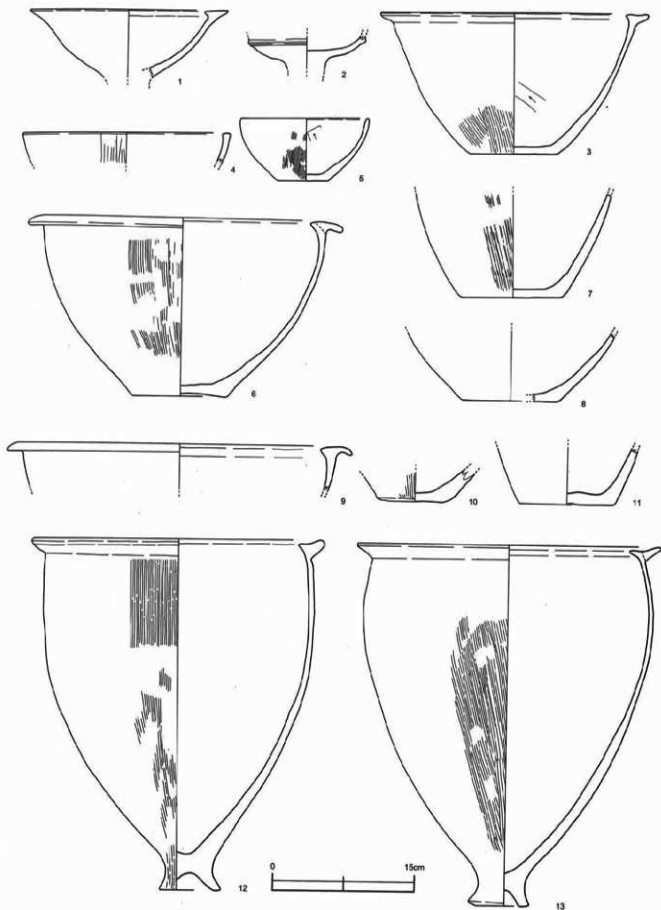
第6圖 竪穴住居 (SB01・02・03) 出土土器 [1/4]

SB04

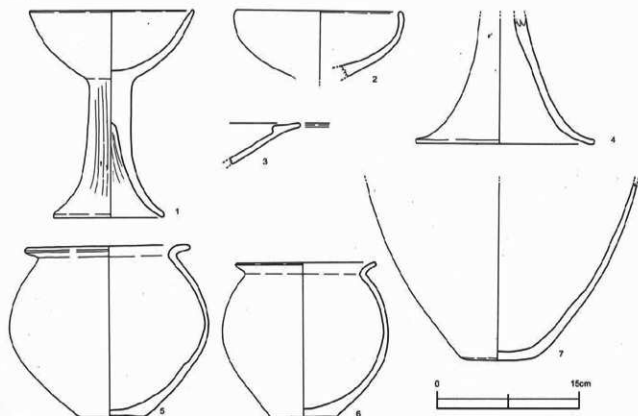


第7図 竪穴住居 (SB04) 出土土器 [1/4]

SB04



第8図 竪穴住居(SB04)出土土器〔1/4〕



第9図 竪穴住居（SB04）出土丹塗土器〔1/4〕

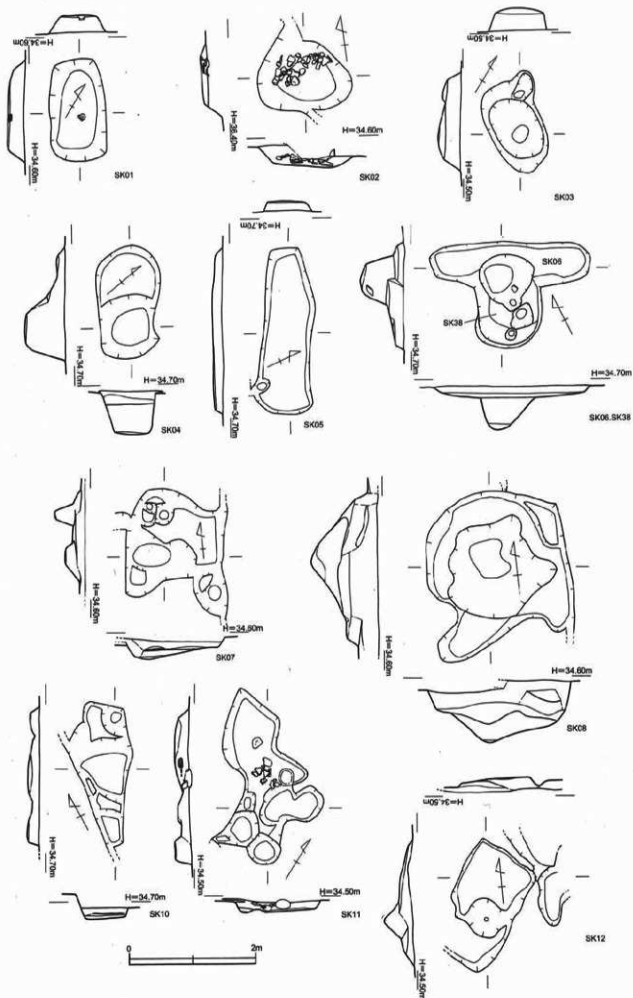
溝

SD01（旧河川）調査区の北側から南側にかけて幅20mから25mの、旧河川が約60m検出された。旧河川は北側が広く、中程で狭くなるが南側で再び広がる。両側の岸の立ち上がりは緩やかで、岸端も不明瞭であるが、わずかに西側の岸部分では、遺構がなくなるため岸端の存在が推定される。また、推定される西側の岸部分から8mの所には、約30mにわたって集落で使用された大小の台石や、石皿、摺石、凹石などを並べて護岸を作っている。護岸は旧河川のⅡ層部分に構築されており、Ⅰ層、Ⅱ層時の旧河川を対象として使用されている。

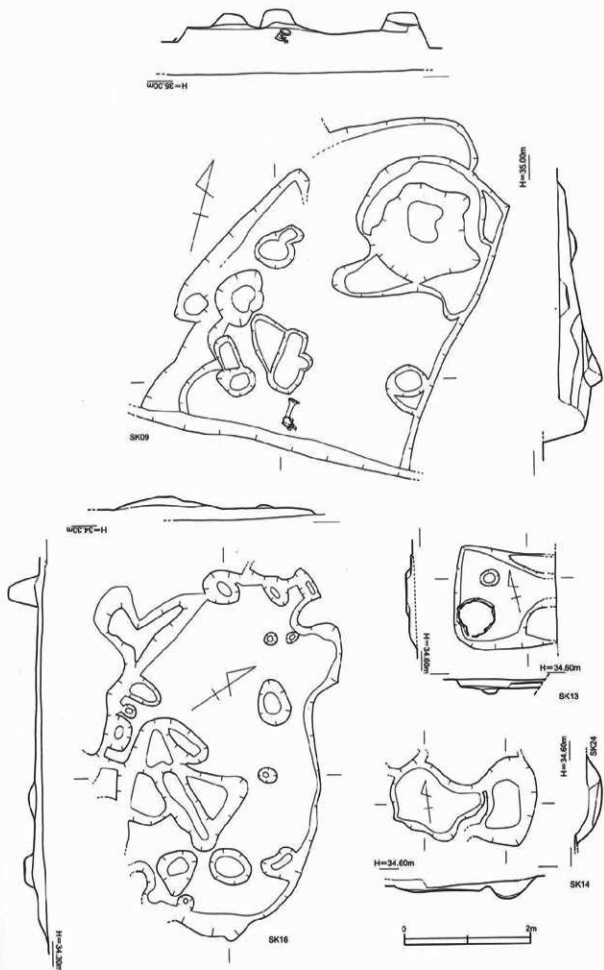
調査区の中央に残した土層を見ると、旧河川の中央付近でⅠ層は10cmから15cmの黒褐色砂質土で、旧河川の全体を覆っており、多量の土器と石器を含んでいる。Ⅱ層は10cmから25cmの黒褐色土で砂質が多く、旧河川の中央付近のみに存在し、凸凹が著しく、多量の土器と石器を含んでいる。Ⅲ層は10cmから15cmの黒褐色砂質土で粘土が混じる。旧河川の全体を覆っており、わずかに土器を含んでいる。Ⅳ層は10cmから25cmの暗黒褐色粘土で、旧河川の全体を覆っており、遺物をほとんど含まない。Ⅴ層は10cmの暗茶褐色砂質混じりの粘土で、Ⅳ層以上が切り込んでいる。東側岸端のみ存在しており、遺物は全く含まない。この結果、Ⅰ層、Ⅱ層時の旧河川は幅が狭く、最大で13m前後と考えられる。遺物は旧河川の西側寄りのⅠ層、Ⅱ層から土器、石器が多量に出土した。

遺構番号	平面プラン	長軸長 (m)	短軸長 (m)	深さ (cm)	長軸方向	出土遺物
SK 01	隅丸長方形	1.6	0.9	29	北西-南東	甕・壺・器台
02	円形	1.5	1.3	30	北西-南東	甕・壺・鉢
03	楕円形	1.6	0.9	37	北西-南東	甕
04	隅丸長方形	1.8	0.9	66	北西-南東	甕・石皿・砥石・片刃石斧
05	隅丸長方形	2.7	0.9	18	東-西	甕
06	隅丸長方形	2.5	0.7	16	北東-南西	甕・壺・鉢・器台(完形)・砥石
07	不明	2.3	1.8	41	南-北	甕
08	不整形	3.0	2.5	90	北西-南東	甕・鉢・高杯・器台・石剣・砥石
09	不整形	5.6以上	4.2		南-北	甕
10	不明	2.3以上	1.0以上	19	南西-北東	甕・器台
11	不整形	2.8	1.3	36	南東-北西	甕・鉢
12	隅丸長方形	3.0	1.5	47	東-西	甕・壺・ミニチュア土器
13	不明	1.6	1.5	22	南-北	大型甕
14	不明	1.4	1.1	6	東-西	甕・壺・器台
15	楕円形	2.2	1.5	46	南-北	甕・器台・磨製石鎌
16	楕円形	5.9	3.5	52	北東-南西	甕・鉢・高杯・器台・砥石・石鎌・石庖丁・紡錘車
17	長方形	1.6	1.3	44	東-西	甕・鉢・壺・蓋
18	不整形	2.8	2.0	39	東-西	甕
19	楕円形	2.5	1.6	58	北西-南東	
20	不整形	3.9	0.9	38	南-北	
21	隅丸方形	1.3	1.2	43	東-西	蓋
22	隅丸方形	1.4	1.0	37	北西-南東	甕
23	不明	3.4	2.8	50	北東-南西	甕
24	不明	1.4	0.8	30	南-北	
25	長方形	3.1	1.8	62	北西-南東	甕・器台
26	不明	2.9	1.6	46	東-西	
27	不明	2.7	1.3	41	南-北	甕・壺・石鎌
28	隅丸方形	0.9以上	0.9以上	11		
29	隅丸方形	1.8	1.4	44	南-北	甕・壺・高杯・鉢
30	隅丸方形	1.5	1.0	38	東-西	甕・蓋
31	楕円形	1.8	1.2	70	北東-南西	甕・器台・石斧
32	円形	1.2	0.9	70	東-西	甕
33	不明	2.0以上	1.1	69	北西-南東	甕・高杯
34	不明	1.5	1.0	47	東-西	
35	不明	1.8以上	0.6以上	25	北東-南西	
36	隅丸長方形	1.3	0.9	10	南-北	甕・鉢
37	楕円形	1.3	0.9	13	北西-南東	甕・蓋・壺・高杯・鉢
38	隅丸長方形	1.5	1.0	67	北東-南西	甕

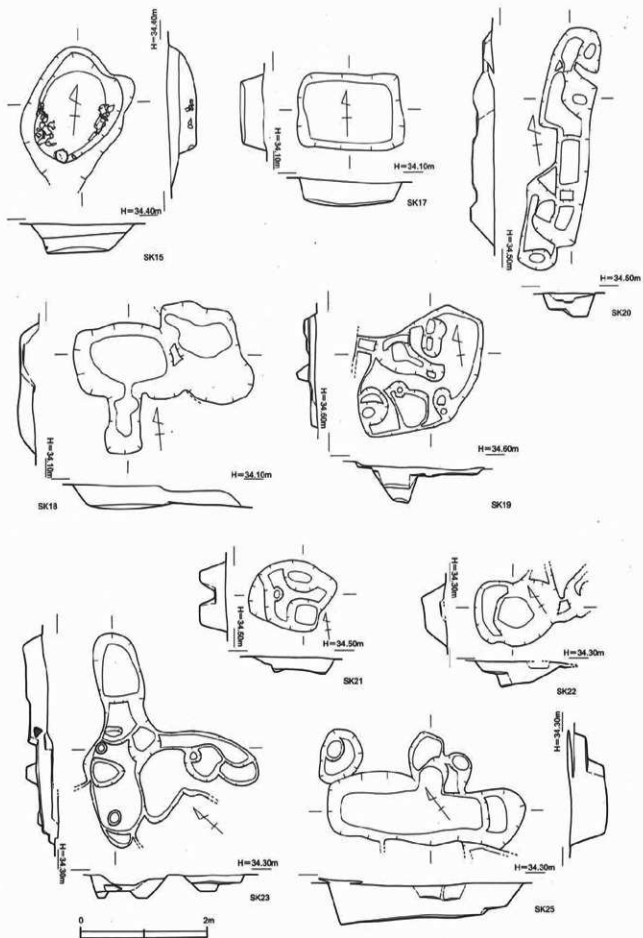
第1表 高島遺跡土坑一覧表



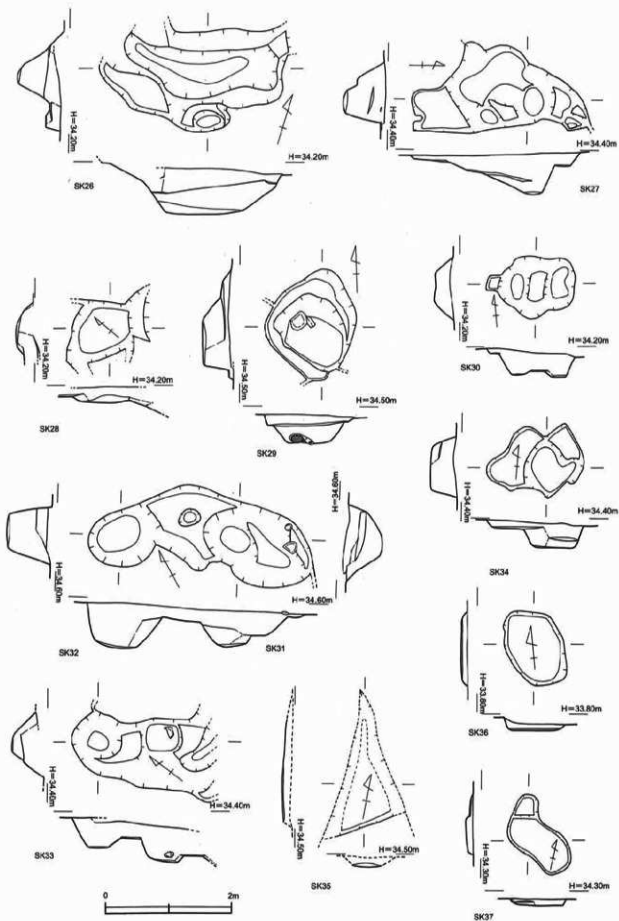
第10図 土坑 (SK01~12・38) [1/60]



第11図 土坑 (SK09・13・14・16・24) [1/60]

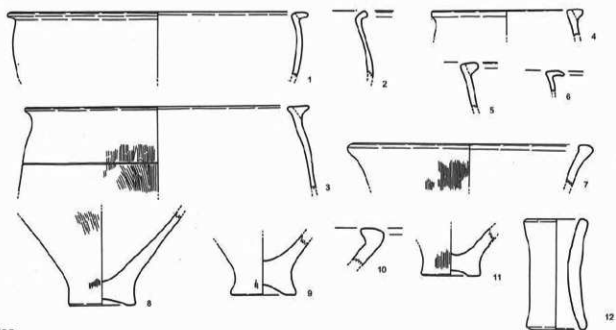


第12図 土墳 (SK15・17~23・25) (1/60)

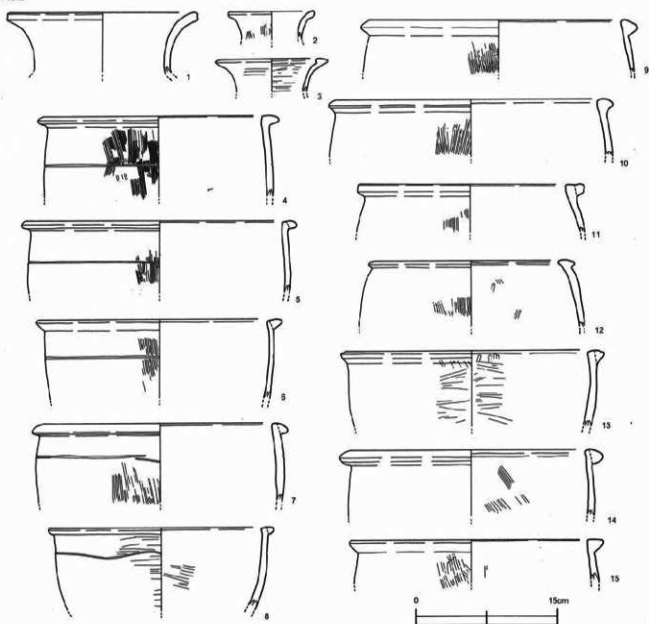


第13図 土壌 (SK26~37) (1/60)

SK01

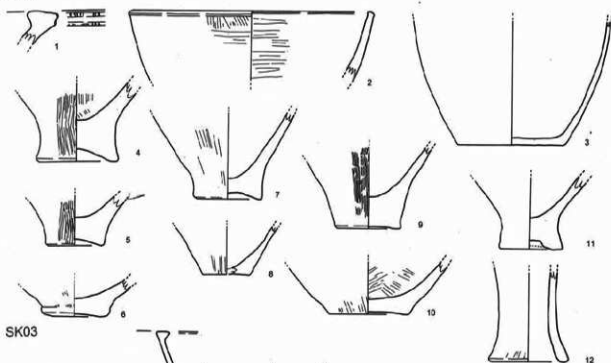


SK02

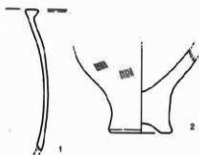


第14図 土壇 (SK01.02) 出土土器 (1/4)

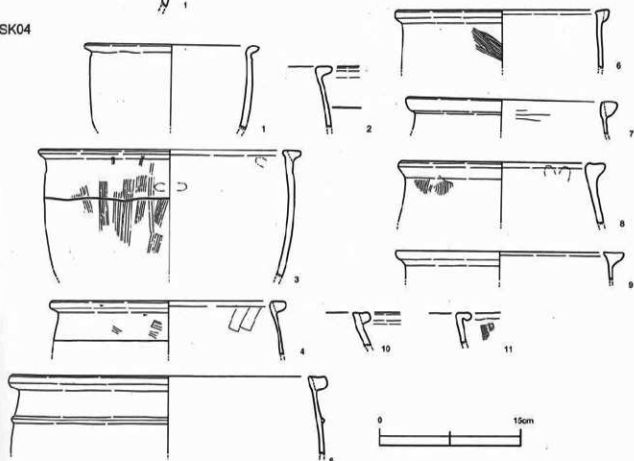
SK02



SK03

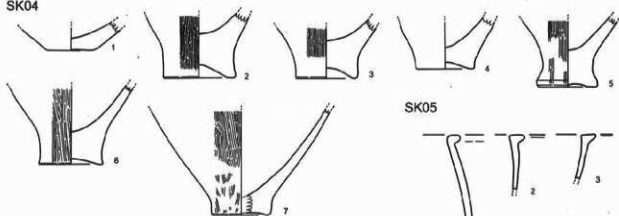


SK04

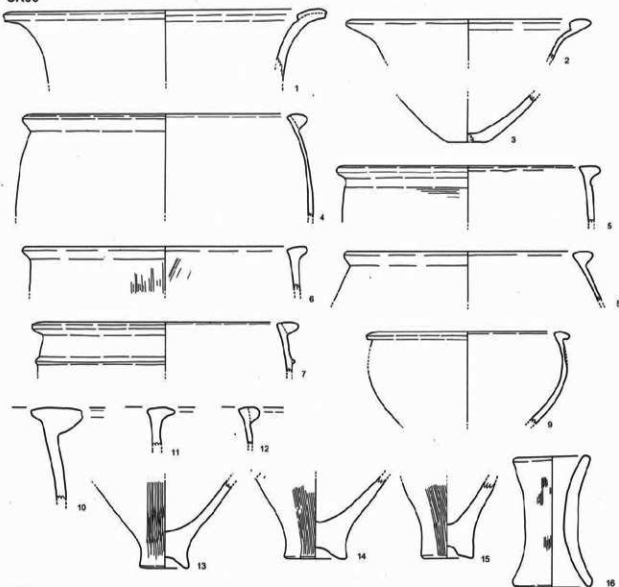


第15圖 土壙 (SK02・03・04) 出土土器 (1/4)

SK04



SK06

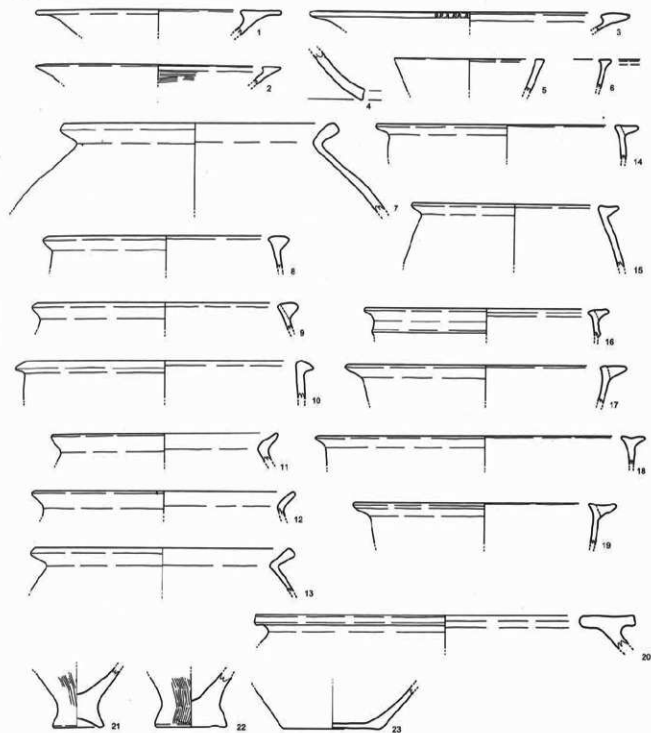


SK07



第16図 土壙 (SK04・05・06・07) 出土土器 (1/4)

SK08

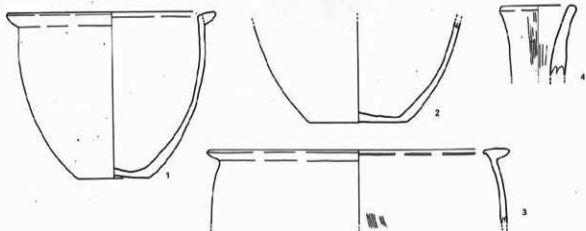


SK09

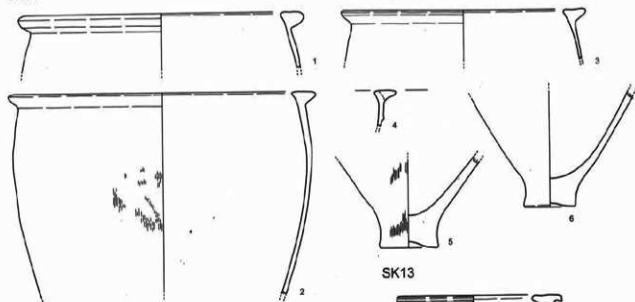


第17圖 土城 (SK08・09) 出土土器 (1/4)

SK10

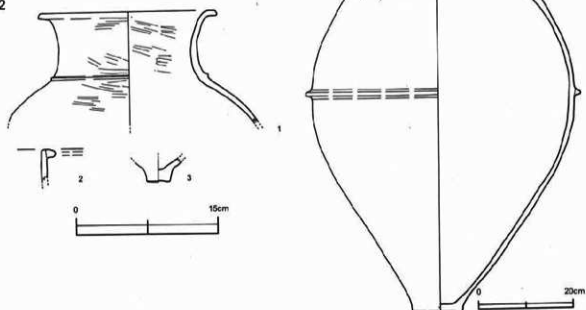


SK11



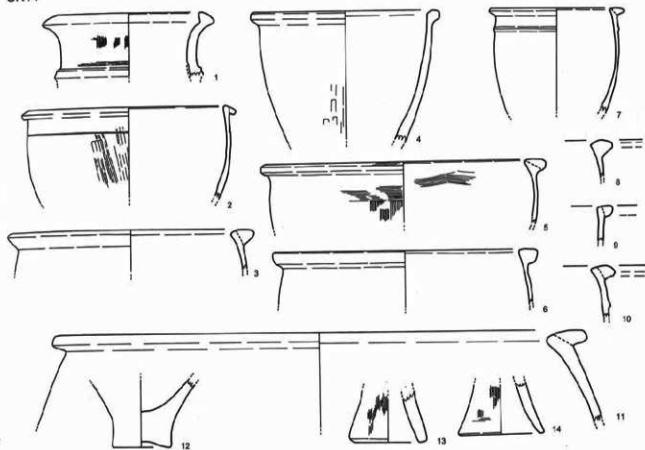
SK13

SK12

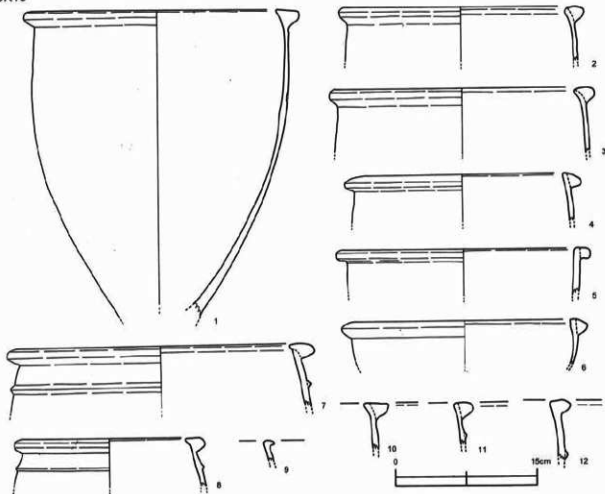


第18圖 土壙 (SK10・11・12・13) 出土土器 (1/4) (1/8)

SK14

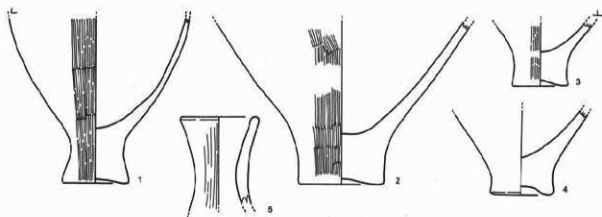


SK15

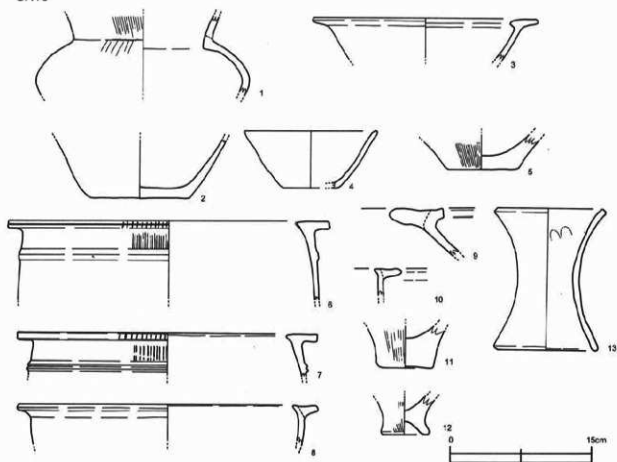


第19圖 土坑 (SK14・15) 出土土器 (1/4)

SK15

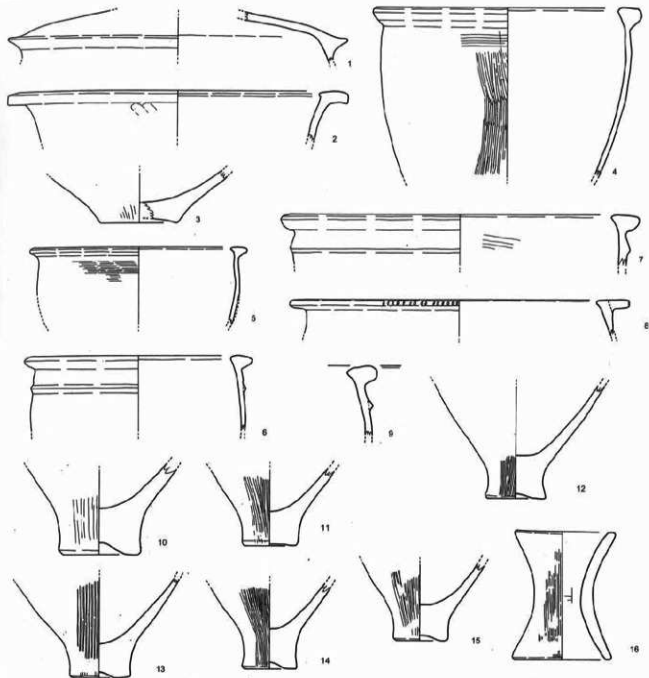


SK16

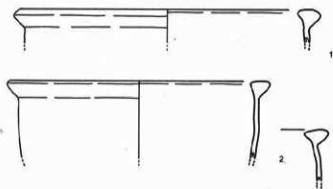


第20図 土壙 (SK15・16) 出土土器 (1/4)

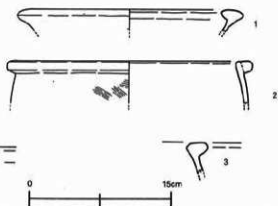
SK17



SK18

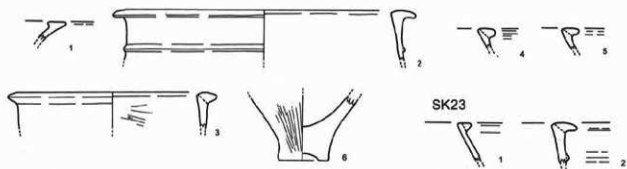


SK21

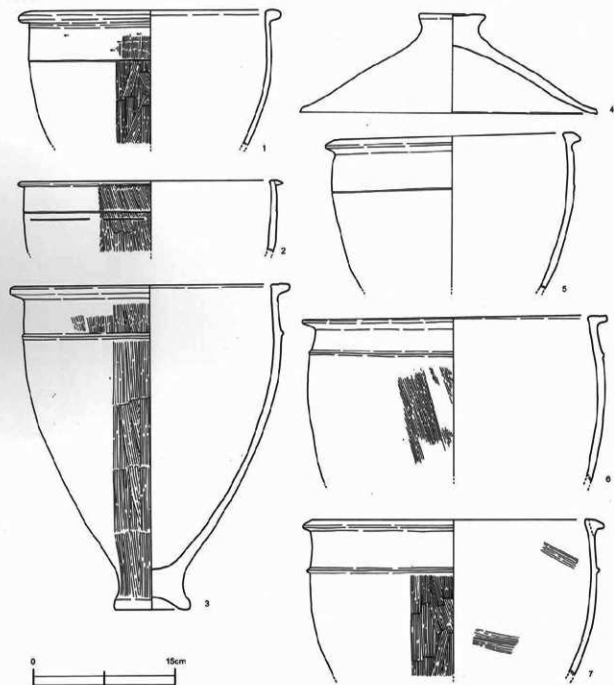


第21圖 土城 (SK17・18・21) 出土土器 (1/4)

SK22

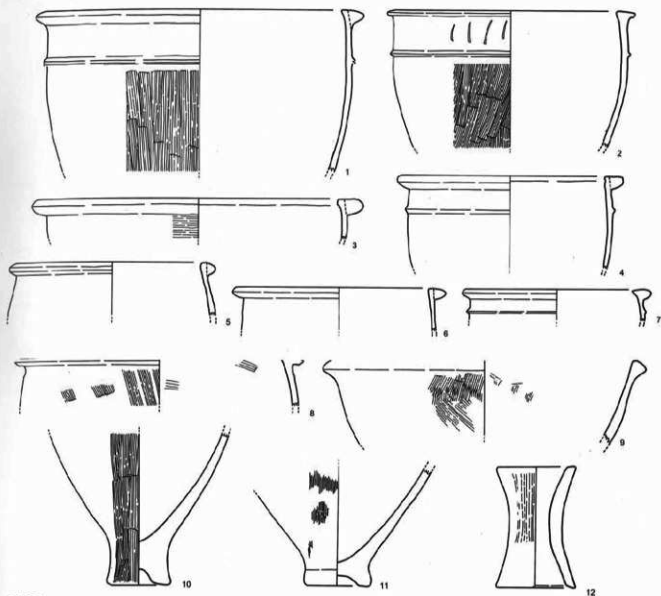


SK25

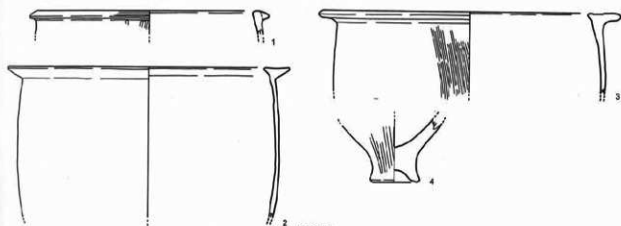


第 22 図 土墳 (SK22・23・25) 出土土器 (1/4)

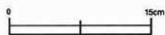
SK25



SK27

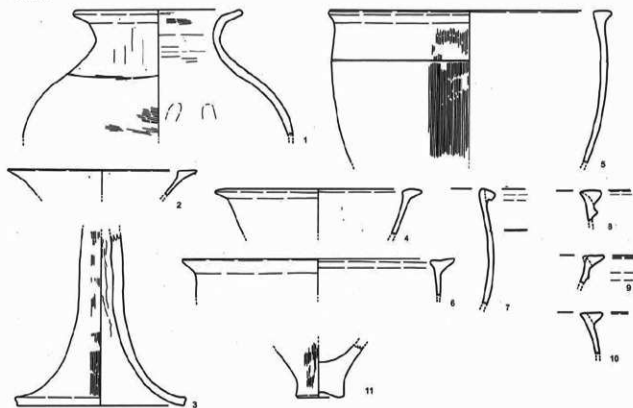


SK28



第23圖 土城 (SK25・27・28) 出土土器 (1/4)

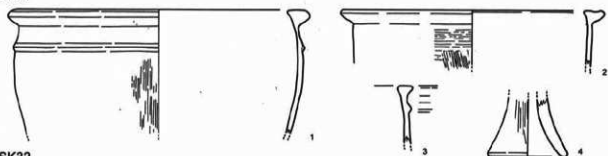
SK29



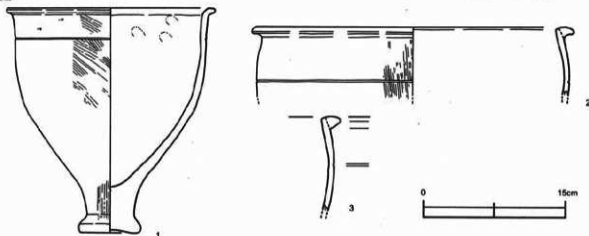
SK30



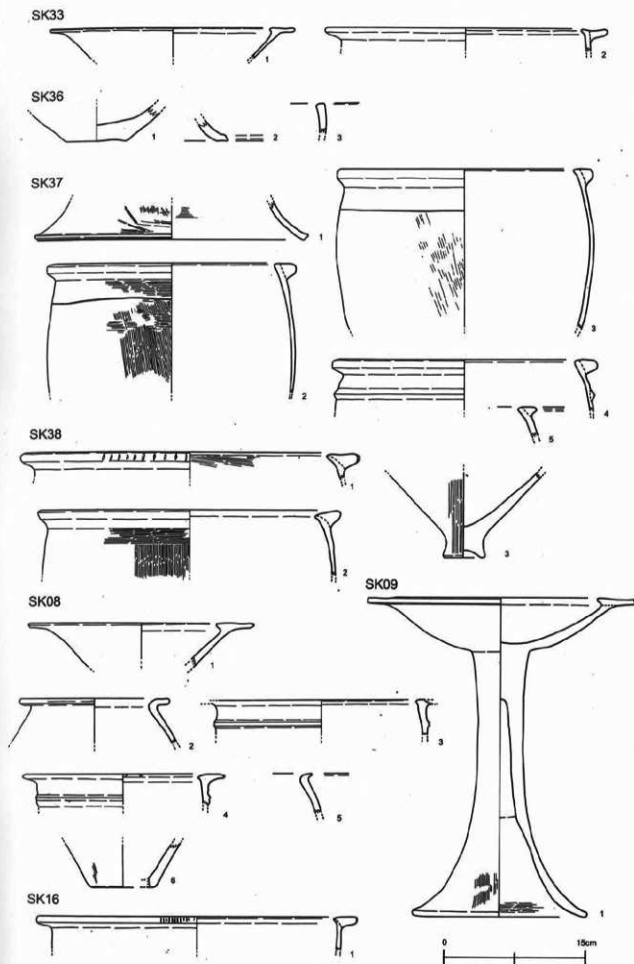
SK31



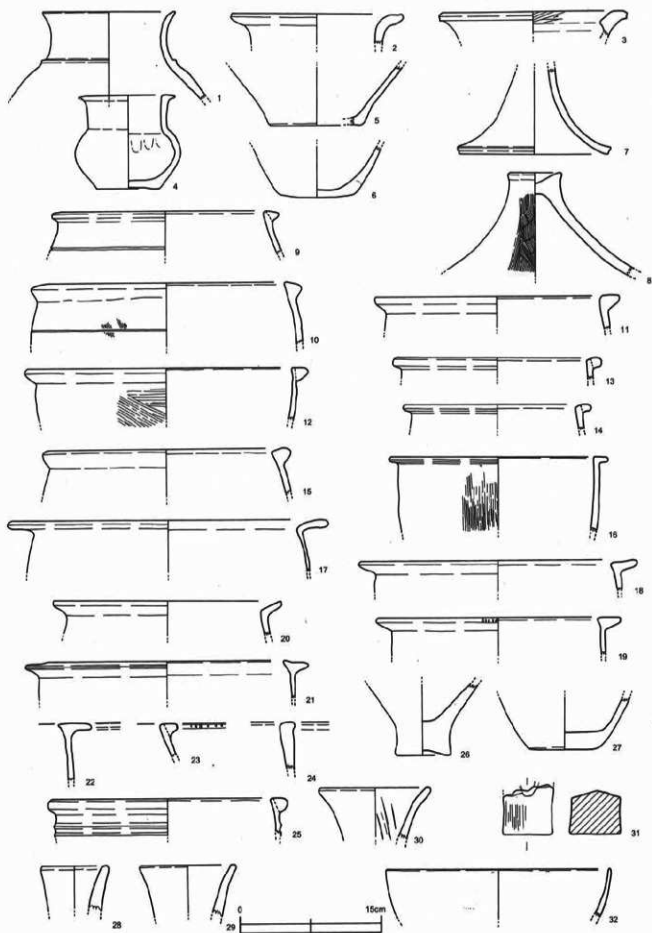
SK32



第24図 土壙 (SK29・30・31・32) 出土土器 (1/4)



第25図 土壙 (SK33・36・37・38) 出土土器・土壙 (SK08・09・16) 出土丹塗土器 (1/4)



第26圖 柱穴(Pit)出土土器〔1/4〕

SD02 (第65図) 調査区の北側で北西側から南東側にかけて、幅1.0mから1.2mの溝が、約2.2m検出された。深さは15cmから20cmで、遺物として壺形土器、高杯、須恵器壺が出土している。

SD03 (第65図) 調査区の北側から南側にかけて、幅0.8mから1.0mの溝が、約3.4m検出された。深さは15cmから20cmで、遺物として甕形土器、壺形土器、鉢形土器が出土している。

SD04 (第65図) 調査区の北側から南側にかけて、幅0.4mから1.0mの溝が、約2.8m検出された。溝は北側が狭く南側に行くにしたがって広がる。深さは20cmで、遺物として甕形土器、壺形土器、鉢形土器、丹塗高杯が出土している。

SD05 (第65図) 調査区の中央に検出された短い溝である。遺物として甕形土器が出土している。

土壌 (第1表、第10～26図)

旧河川の西側を中心に多数の土壌が発見された。攪乱が著しいこともあるが、形や大きさもさまざまで、其の性格も不明なものが多い。出土遺物は、甕形土器、壺形土器、無頸壺形土器、鉢形土器、高杯、器台など土器が多く出土したほか、石器として石斧、砥石、石剣、石庖丁、紡錘車、石鏃が出土している。

旧河川 (SD01) 出土遺物

甕形土器 (第27図～第37図)

甕形土器は形態により3種類に分類できる。

甕形土器は3つに区分できる。

I類a (第27図) 口縁部が外反するいわゆる如意状口縁で、口唇部を丸くつくる。口縁部だけの破片のため全体は不明であるが、胴部はあまりふくらみを持たない。外面は縦方向の細かな刷毛目調整と、横方向の刷毛目を施している。内面は横なでや、なでが残る。口縁部の直径は15cm前後と25cm前後と2種類があり、遺物の量としては少ない。

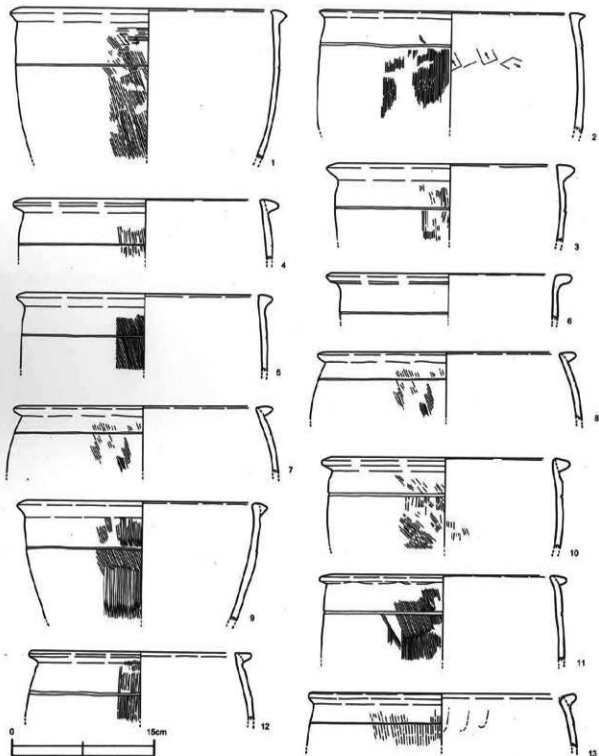
I類b (第27・28図) 口縁部は直立又はやや内彎する。口縁部の上端外面に粘土帯を貼り付け、上面を水平に仕上げる。粘土帯は小さく丸みを持っており、1点のみ破片ではあるが刻目を持つものもある。I類aと同様、あまり胴部はふくらみを持たない。口縁下には一条の沈線を巡らすものが大半で、わずかに1点のみ2条の沈線を巡らしている。外面は縦方向の細かな刷毛目と、やや荒い刷毛目調整が残り、刷毛目調整後に沈線を施している。内面はわずかに刷毛目調整やなで調整が残る。口縁部の直径は25cmから30cm前後で、遺物の量としては多い。

I類c (第29図) 口縁部は直立又はやや内彎する。口縁部の上端外面に小さな粘土帯を貼り付

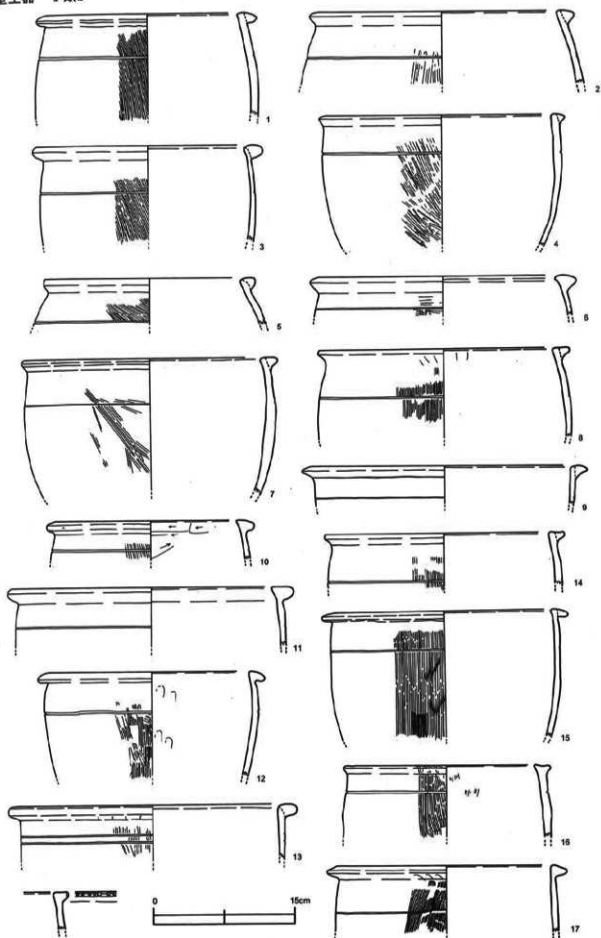
壺型土器 I 類a



壺型土器 I 類b

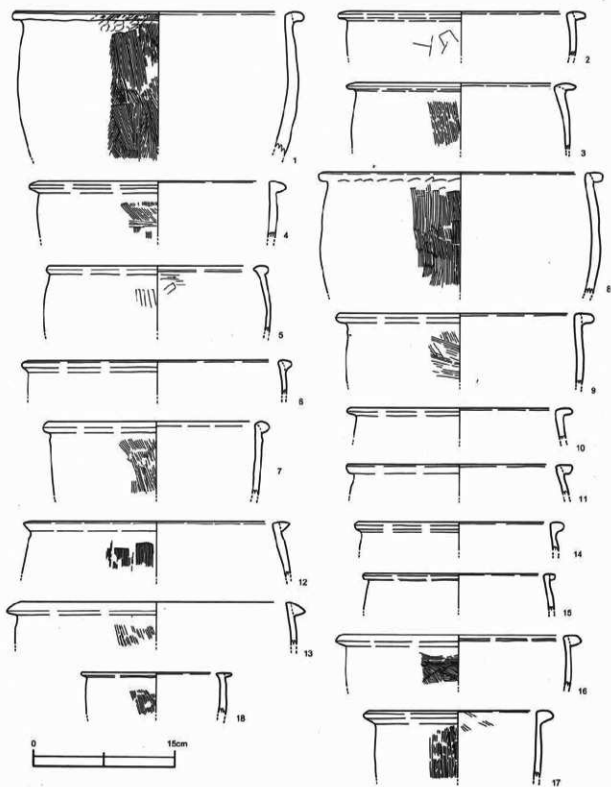


第27図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

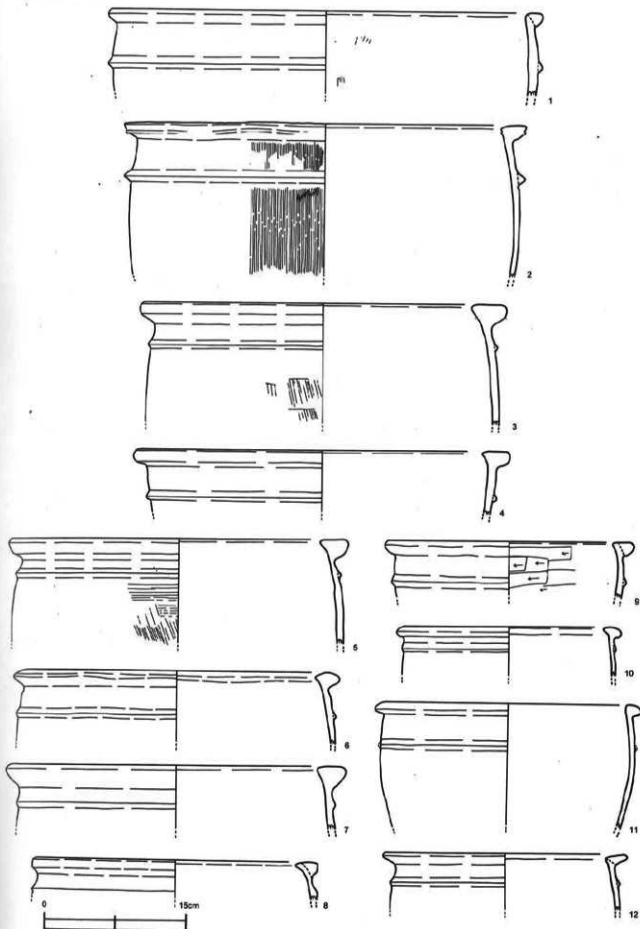


第28圖 旧河川 (SD01) 出土土器

甕型土器 I類c

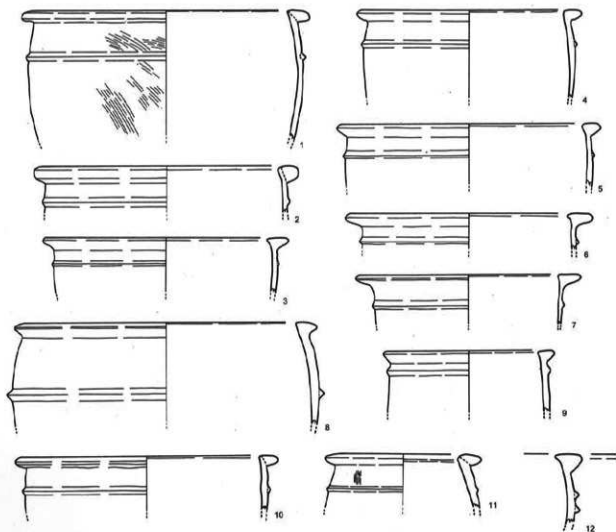


第29圖 旧河川 (SD01) 出土土器 [1/4]

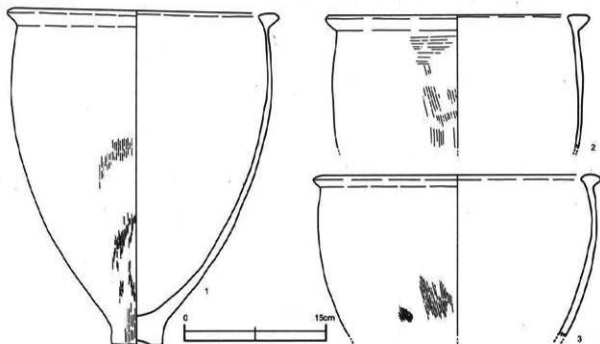


第30圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

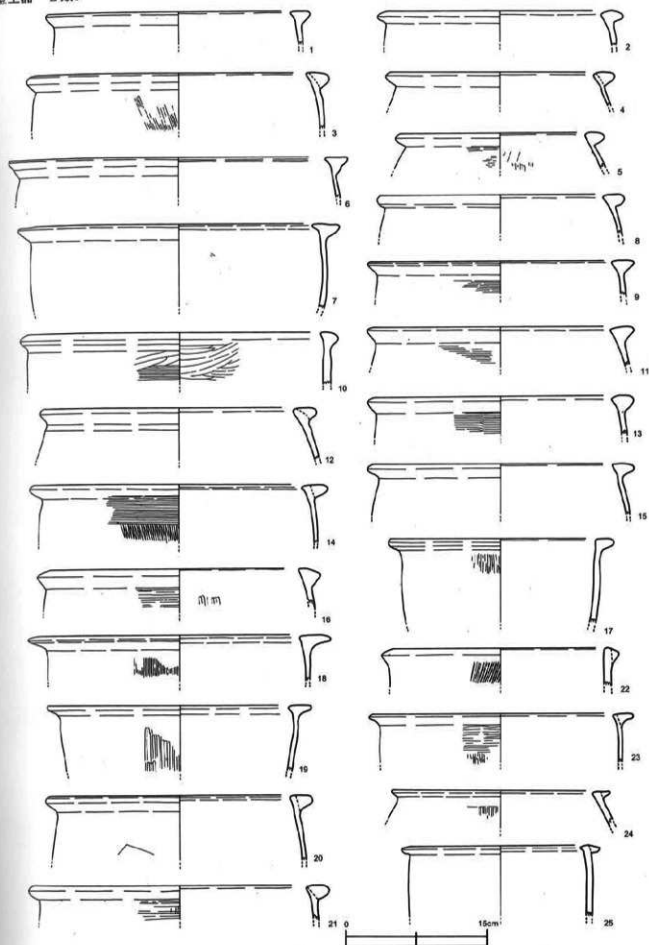
甕型土器 II類b



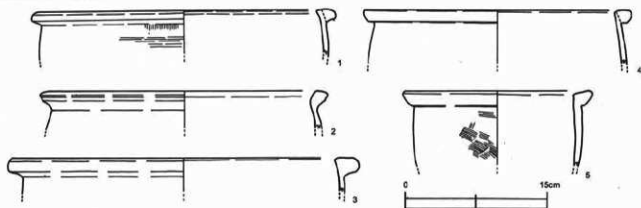
甕型土器 II類c



第31圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)



第 32 図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)



第33図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

け、上面を水平に仕上げる。粘土帯は小さく丸みを持っており、余り肥大しない。I 類 a、I 類 b と同様、あまり胴部はふくらみを持たない。外面は縦方向の細かな刷毛目と、やや荒い刷毛目調整を施すものが多い。内面はなで調整が残る。口縁部の直径は 2.5 cm から 3.0 cm 前後で、遺物の量としては比較的多い。

甕形土器 II 類は現在のところ、2 つに区分できる。

II 類 b (第 30・31 図) I 類 b と同様口縁部は直立又はやや内彎する。口縁部の上端外面に粘土帯を貼り付け、粘土帯を肥大させるものもある。口縁下には一条の形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つものが大半ではあるが、1 点のみ 2 条の三角形の貼り付けの突帯を持つ。外面は縦方向の細かな刷毛目と、やや荒い刷毛目調整を施すものが多い。内面はなで調整が多い。口縁部の直径は 2.5 cm から 3.0 cm 前後で、一部 4.0 cm 前後の大型品も混じる。遺物の量としては多い。

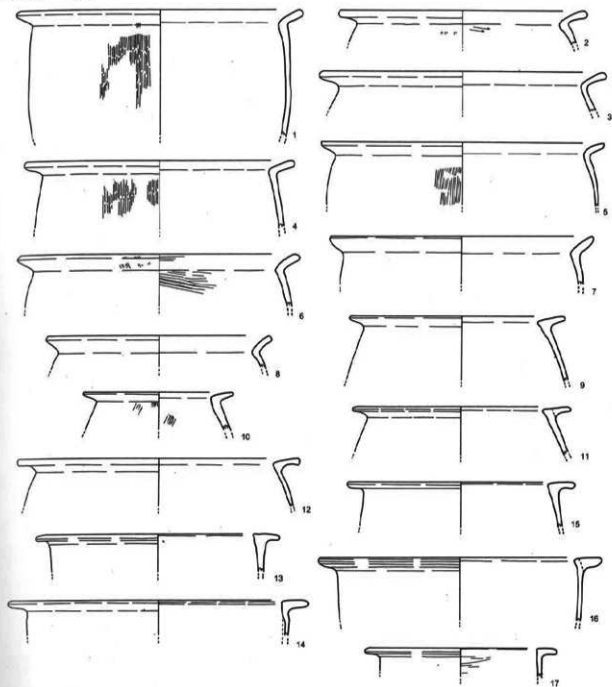
II 類 c (第 31・32・33 図) I 類 c と同様、口縁部は直立又はやや内彎する。口縁部の上端外面に粘土帯を貼り付け、上面を水平又は丸みを持たせる。粘土帯は I 類 c より肥大させるものもある。胴部から底部にかけて緩やかで、径の小さいやや上げ底の底部に移る。外面は縦方向の細かな刷毛目と、やや荒い刷毛目調整を施すものが多い。内面はなでとやや荒い刷毛目調整が多い。口縁部の直径は 2.5 cm から 3.0 cm 前後で、遺物の量としては多い。

甕形土器 III 類は 4 つに区分できる。

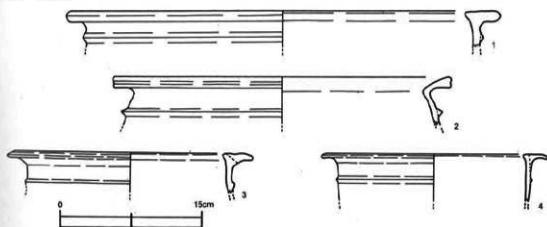
III 類 a (第 34 図) 口縁部が「L」字状又は「く」字状となるもので「L」字状の口縁部の上端は水平になり口唇部は丸くつく。「く」字状はゆるやかに「く」字状に折れ口唇部は丸くつく。外面は縦方向の細かな刷毛目調整やや荒い刷毛目調整、内面はなでとやや荒い刷毛目調整が多い。口縁部の直径は 2.5 cm から 3.0 cm 前後で、遺物の量としては少ない。

III 類 b (第 34・35 図) 口縁部はほぼ直立かわずかに内彎し、「T」字形になる。内唇はわずかに張り出し、口縁部の上端は平坦かやや凹むもの、外側に大きくはね上げるものがある。外側口唇部は丸みを持っている。口縁下には一条の形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つ。内、外面ともなで調整が多い。口縁部の直径は 2.5 cm から 3.0 cm 前後で、一部 4.0 cm 前後の大型品も混じる。遺物の量としては比較的多い。

壺型土器 Ⅲ類a

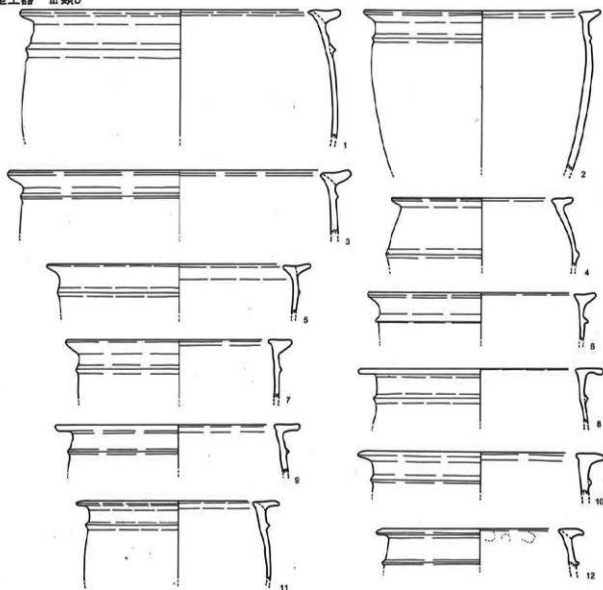


壺型土器 Ⅲ類b

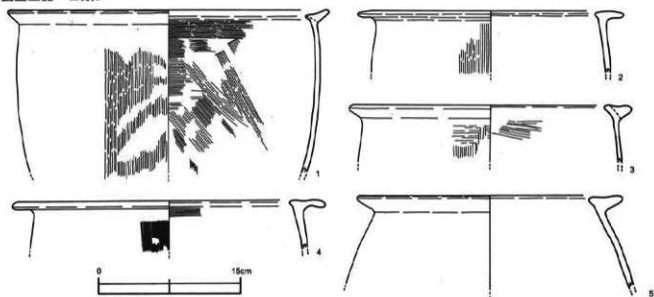


第34図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

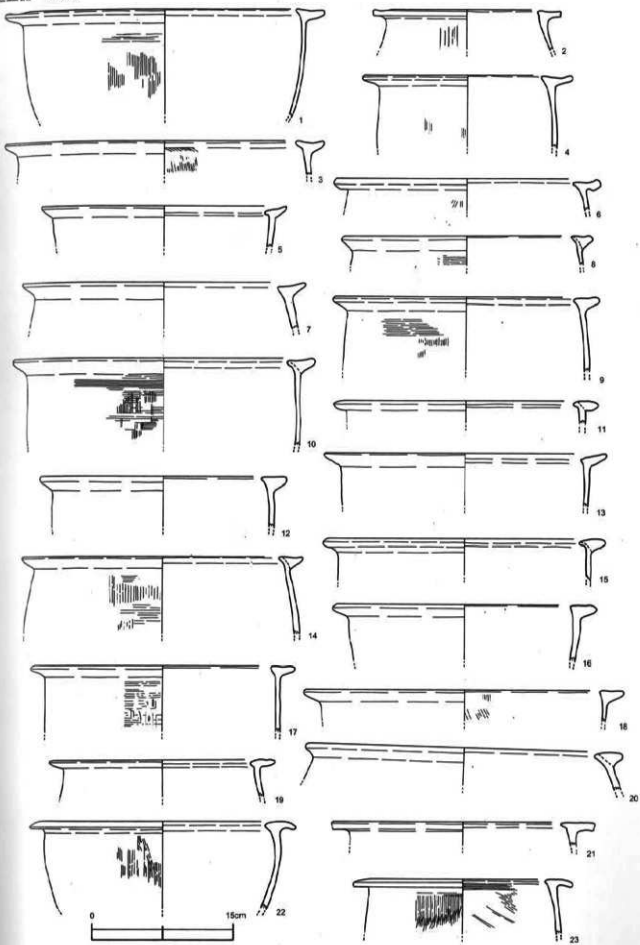
甕型土器 III類b



甕型土器 III類c

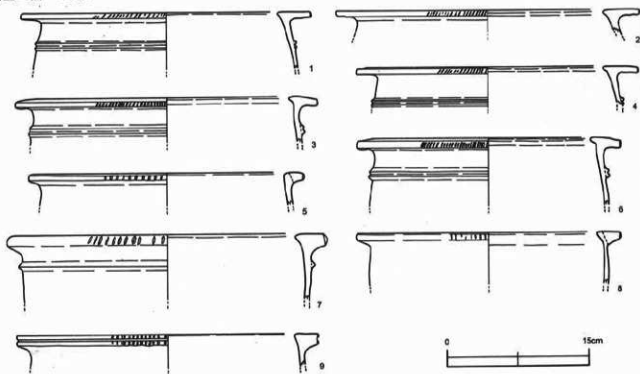


第35圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)



第 36 図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

変型土器 Ⅲ類d



第37図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

Ⅲ類c (第35・36図) 口縁部の形態はⅢ類bと同じであるが、口縁下の貼り付けの突帯を持っていない。外面は縦方向と横方向の細かな刷毛目調整、やや荒い刷毛目調整を施す。内面はなでと、斜め方向の細かな刷毛目調整、やや荒い刷毛目調整が多い。口縁部の直径は30cm前後が多く、遺物の量も多い。

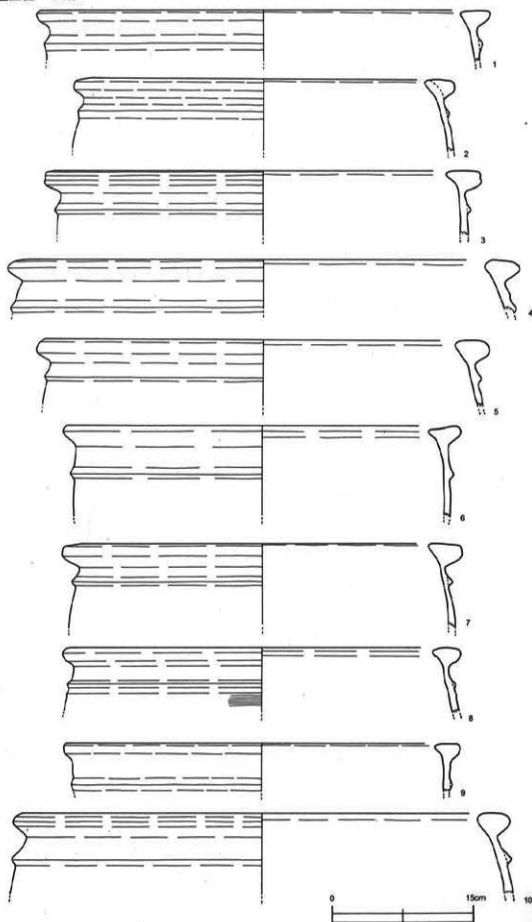
Ⅲ類d (第37図) 口縁部はほぼ直立かわずかに内彎し、「T」字形になる。内唇はわずかに張り出し、口縁部の上端は平坦で、口唇部は丸みを持ち、刻み目を施す。口縁部のすぐ下に一条の形骸化した、台形又は三角形の貼り付けの突帯を持つものと、持たないものがある。内、外面ともなで調整が多い。口縁部の直径は30cmから33cm前後で、遺物の量としては少ない。

大型変形土器 (第38図～第40図)

大型変形土器は、2つに分類できる。

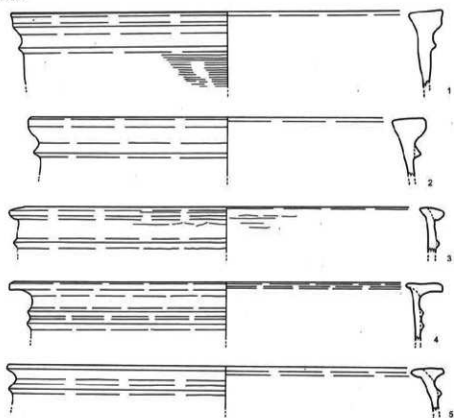
大型変形土器Ⅱ類は、2つに区分できる。

Ⅱ類b (第38・39図) Ⅱ類bの変形土器と同様、口縁部は直立又はやや内彎し、口縁部の上端外面に、肥大した粘土帯を貼り付ける。口縁部の上端は平坦で、口唇部は丸みを持つ。口縁下には一条の形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つ。1点のみではあるが、二条の突帯を持つものも含まれる。内、外面はなで調整が多い。口縁部の直径は40cmから50cm前後で、遺物の量としては比較的多い。

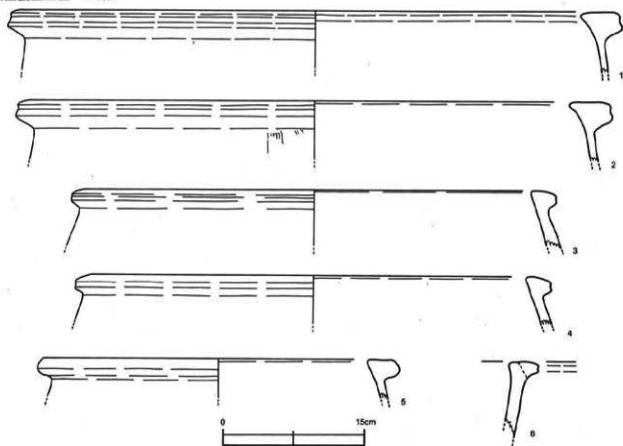


第38図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

大型甕型土器 II類b

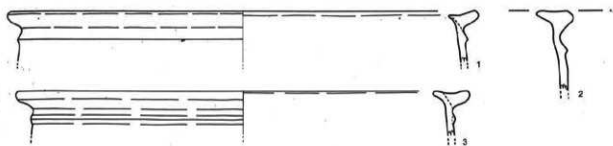


大型甕型土器 II類c

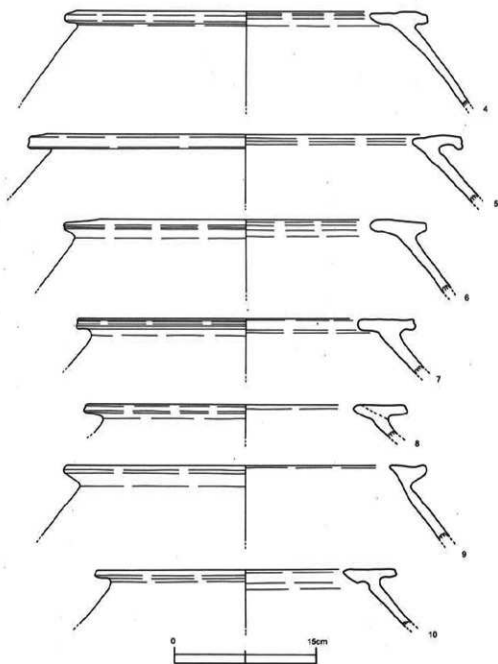


第39図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

大型腰型土器 III類b

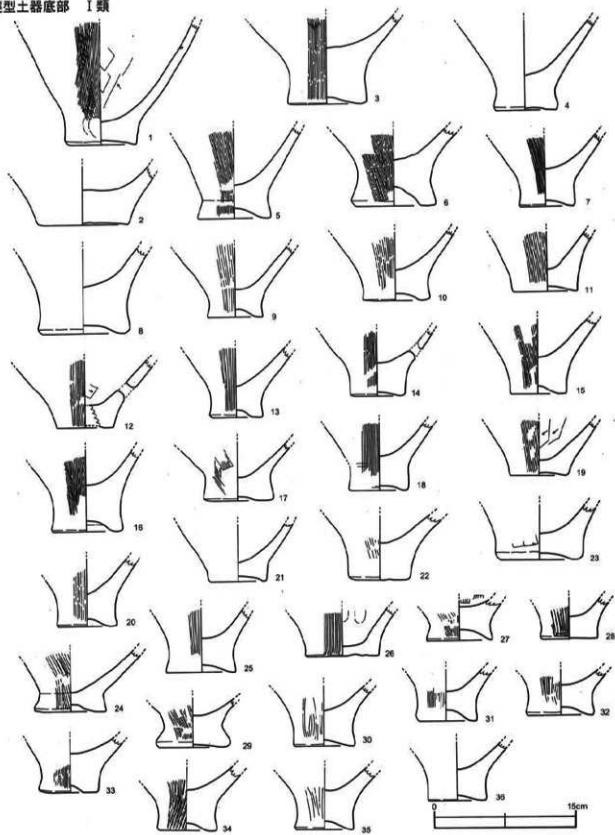


大型腰型土器 III類e



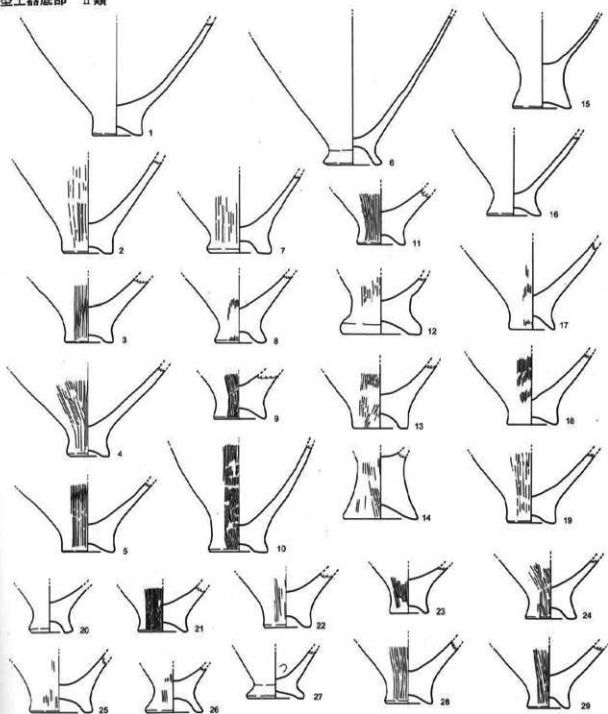
第40図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

甕型土器底部 I 類

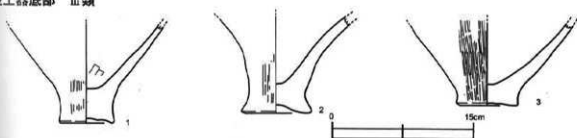


第 41 圖 旧河川 (SD01) 出土土器 [1/4]

瘦型土器底部 II 類



瘦型土器底部 III 類



第 42 圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

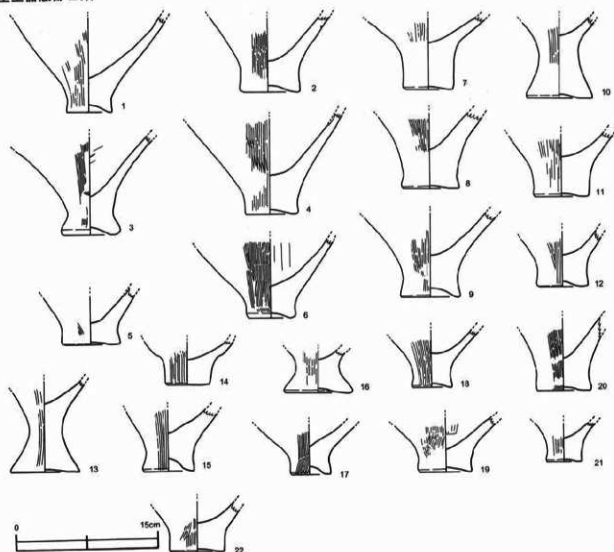
Ⅲ類c (第39図) Ⅱ類cの甕形土器と同様、口縁部は直立又はやや内彎するが一部大きく胴部が張るものもある。口縁部の上端外面に、厚い粘土帯を貼り付け、粘土帯を巨大化させる。口縁部の上端は平坦で、口唇部は丸く作るものと凹面状に作るものがある。外面はなで調整が多いが、荒い刷毛目調整後、なで調整を施すものもあり、内面はなで調整が多い。口縁部の直径は40cmから60cm前後で、遺物の量としては比較的少ない。

大型甕形土器Ⅲ類は現在のところ、2つに区分できる。

Ⅲ類b (第40図) 口縁部はほぼ直立して「T」字形になり、内容が張り出す。口縁部の上端は平坦かやや凹むもの、外側に大きくはね上げるものがある。外側口唇部は丸みを持っている。口縁下には一条の形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つ。内、外面ともなで調整が多い。口縁部の直径は50cm前後で、遺物の量としては少ない。

Ⅲ類e (第40図) 口縁部から胴部にかけて大きく内彎する。口縁部は「T」字形になり、内容が大きく内側に張り出す。口縁部の上端は平坦かやや凹むもの、外側に大きく粘土を貼り付けて口

甕形土器底部Ⅲ類



第43図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

縁部を大きく表現している。外側口唇部はわずかに凹状につくる。内、外面ともなで調整が多い。
口縁部の直径は30cmから45cm前後で、遺物の量としては比較的少ない。

壺形土器底部（第41図～第43図）

壺形土器の底部は形態によって3種類に分類できるが、どの口縁部と一致するかは不明である。

I類（第41図）胴部から底部にかけて細く締まり、底部の径は比較的小さく、わずかに上げ底になる。端部はほぼ平坦につくられる。外面は縦方向の刷毛目調整、内面と底内側はなで調整が行われている。

II類（第42図）I類と同様胴部から底部にかけて細く締まり、底部の径は比較的小さい、底はやや高い上げ底になり、端部は丸くつくられる。外面は縦方向の、内面はなで調整が多いが刷毛目調整も少量ある。底内側はなで調整が行われている。

III類（第42・43図）I・II類と比較して、底部の径が大きくなり、底はわずかな上げ底になる。端部は丸くつくられる。外面は縦方向の刷毛目調整、内面と底内側はなで調整が行われている。

壺形土器（第44図～第49図）

壺形土器の出土は量的に少ないが、壺形土器、大型の壺形土器、無頸の壺形土器の3種類がある。

壺形土器I類は突帯等により2つに区分できる。

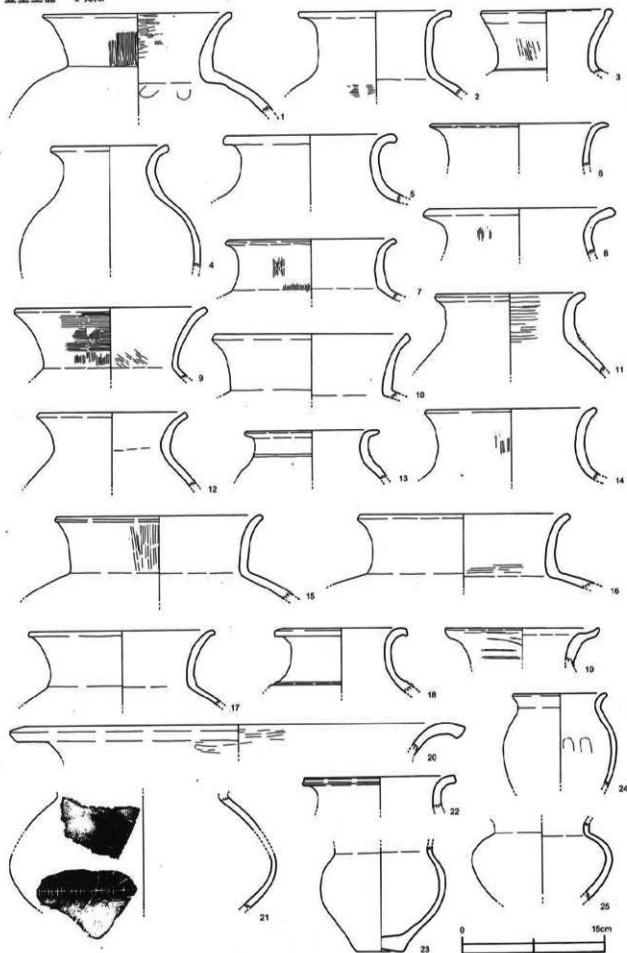
I類a（第44図）口縁部が外に大きく開くいわゆる如意状口縁で、口縁は厚くつくられ、口縁端部は丸くつくられる。口縁部から胴部にかけては肩が大きく張り出し、最大径が胴部にある。わずかなではあるが、口縁部と肩部の境に一条の沈線を巡らしたり、肩部横方向にへら状のもので線刻文様や、胴部横方向に2本の細い沈線を施すものもある。外面は細かな刷毛目調整後へら磨きで、内面はへら磨きで調整している。口縁部の直径は15cmから20cm前後で、遺物の量としては多い。

I類b（第45図）口縁部が外に大きく開くいわゆる如意状口縁で、口縁は比較的薄くつくられ、口唇部は丸くつくられるものと、わずかに凹状につくるものがある。口縁部と胴部の境には形散化した三角形の貼り付けの突帯を持ち、肩が大きく張り出す。外面はへら磨きで、内面は横なでやへら磨きで調整している。口縁部の直径は15cm前後と30cm前後で、遺物の量としては少ない。

壺形土器II類

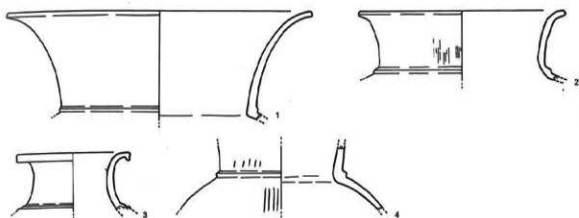
II類（第45図）口縁部が外方に大きく開き、全体に比較的薄くつくられている。口縁部はいわゆる鋤先口縁であるが、余り内唇は発達せず、わずかに表現されている。口唇部上端はほぼ平坦でわずかに凹面を持っており、口唇部は丸くつくられるものと、わずかに凹状につくられるものがあり、1点のみ刻目を施すものもある。口縁部からと胴部にかけては不明であるが、肩が張ったものと思われる。外面はへら磨きで、暗文を施すものもあり、内面は横なでやへら磨きで調整している。口縁部の直径は20cm前後と30cm前後のものがあり、遺物の量としては比較的多い。

大型壺形土器II類

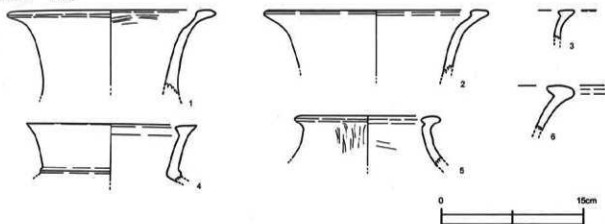


第44図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

壺型土器 I類b



壺型土器 II類



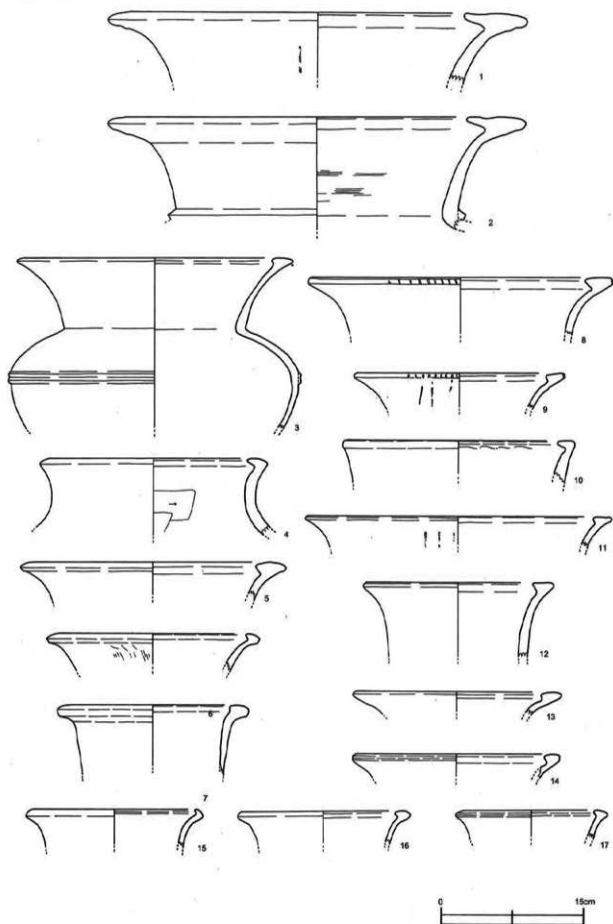
第45図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

II類 (第46図) 壺形土器が大型化したもので、内唇は発達する。外面はへら磨きで、暗文を施すものもあり、内面は横なでやへら磨きで調整している。口縁部の直径は45cm前後があり、遺物の量としてはわずかである。

無頸壺形土器 (第47図)

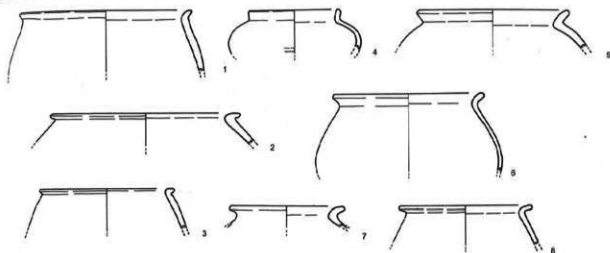
無頸壺形土器は、形態により2つに分類できる。

I類 (第47図) 口縁部は短かく、外方に強く屈曲し直立する無頸の壺で、比較的厚めにつくられている。口縁部から肩にかけては丸みを持ち、胴部中程に最大径があり、球形に近い形となる。外面はへら磨きで、内面は横なでやへら磨きで調整している。口縁部の直径は10cmから15cm前後で、遺物の量としてはわずかである。

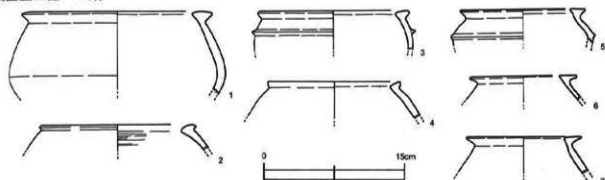


第 46 図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

無頸壺型土器 I 類



無頸壺型土器 II 類



第 47 図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

Ⅱ類 (第 47 図) 口縁部は口唇の外側に粘土帯を貼り付ける。口縁部から胴部にかけては強く屈曲し、最大径は胴部にある。胴部には形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つ。外面はへら磨きで、内面は横方向の刷毛目やへら磨きで調整している。口縁部の直径は 15cm 前後で、遺物の量としてはわずかである。

鉢形土器 (第 50 図～第 54 図)

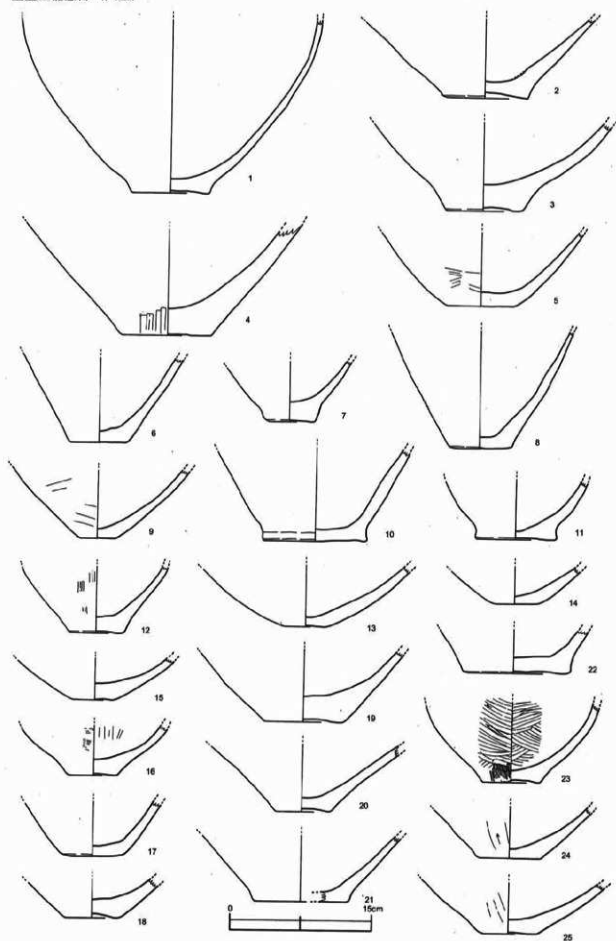
鉢形土器は、口縁部の形態により 3 種類に分類できる。

鉢形土器 I 類

I 類 (第 50 図) 口縁部がわずかに外反し、口唇部は丸く、胴部から底部にかけてなだらかに続く。鉢形土器は浅鉢形と深鉢形の両方があり、浅鉢形の底部はやや上げ底になる。外面は荒い刷毛目調整、内面と底内側はなで調整が行われている。口縁部の直径は 20cm 前後で、高さは 10cm 前後となり、遺物の量としてはわずかである。

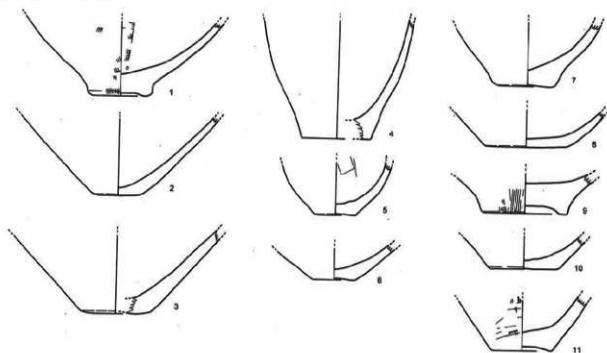
鉢形土器Ⅱ類は、口縁部の形態により 3 つに区分できる。

Ⅱa 類 (第 50 図) 口縁部は直立し、わずかに内彎する。胴部から底部にかけてなだらかで平底

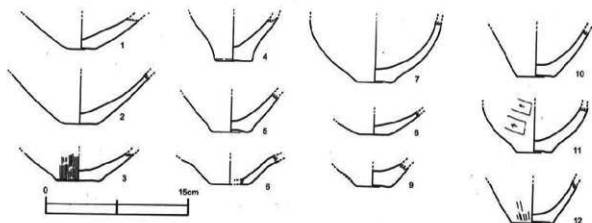


第48圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

壺型土器底部（大型）



壺型土器底部（小型）



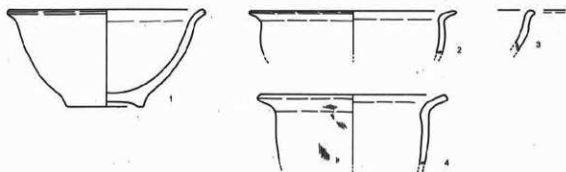
第 49 図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

の底部に続く。口縁部は壺形土器Ⅱb、Ⅱc類と同じ、口縁部の上端側面に粘土帯を貼り付け、粘土帯を肥大させるものもある。口縁下や胴部に一条の形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つものもあり、底部は平底となる。外面は縦方向に荒い刷毛目を施すものが多い。内面は荒い刷毛目調整が多い。口縁部の直径は10cmから20cm前後で、いずれも小型の土器が多い。遺物の量としては比較的多い。

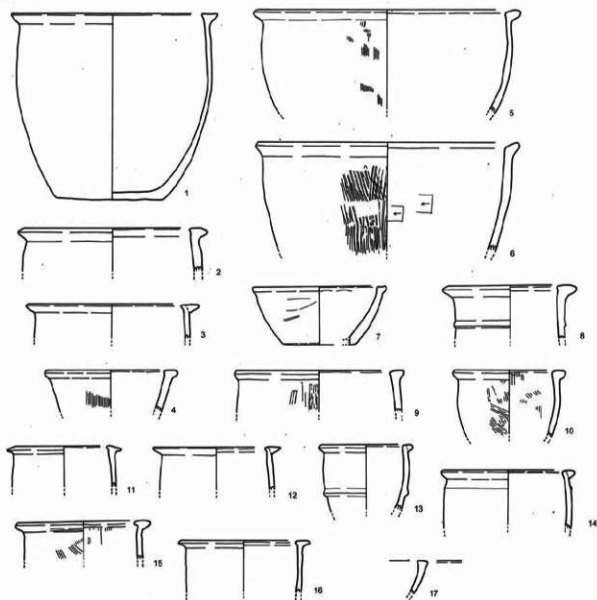
Ⅱb類（第51図）口縁部はほぼ直立し、口縁部の上端外面に粘土帯を貼り付け、粘土帯を肥大させ上端部を水平に仕上げる。深鉢形が多い。外面は縦方向の荒い刷毛目を施すものが多く、内面はなでと刷毛目調整が多い。口縁部の直径は20cm前後で、遺物の量としては比較的多い。

Ⅱc類（第51図）胴部から口縁部は大きく外方に開き、口縁部はほぼ直立する。口唇部は厚く丸みを持っており、底部はわずかに上げ底となる。小型で浅鉢形が多い。外面は横方向の刷毛目、内面はなでと横方向刷毛目調整を施している。口縁部の直径は14cm前後、高さは6cm前後となり、遺物の量としては比較的小さい。

鉢型土器 I 類

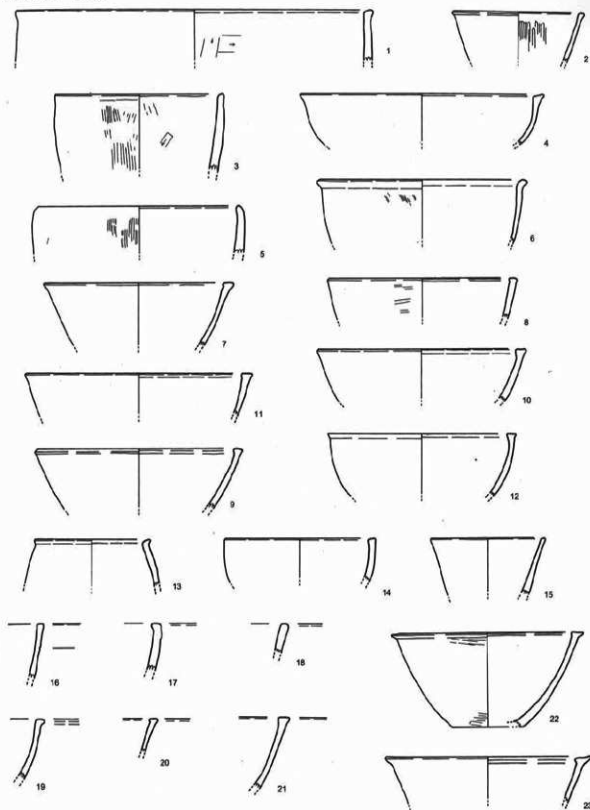


鉢型土器 II 類a

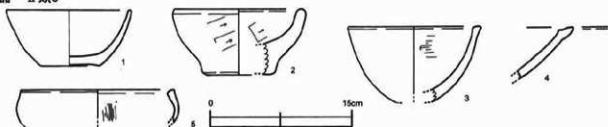


第 50 図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

鉢型土器 II類b

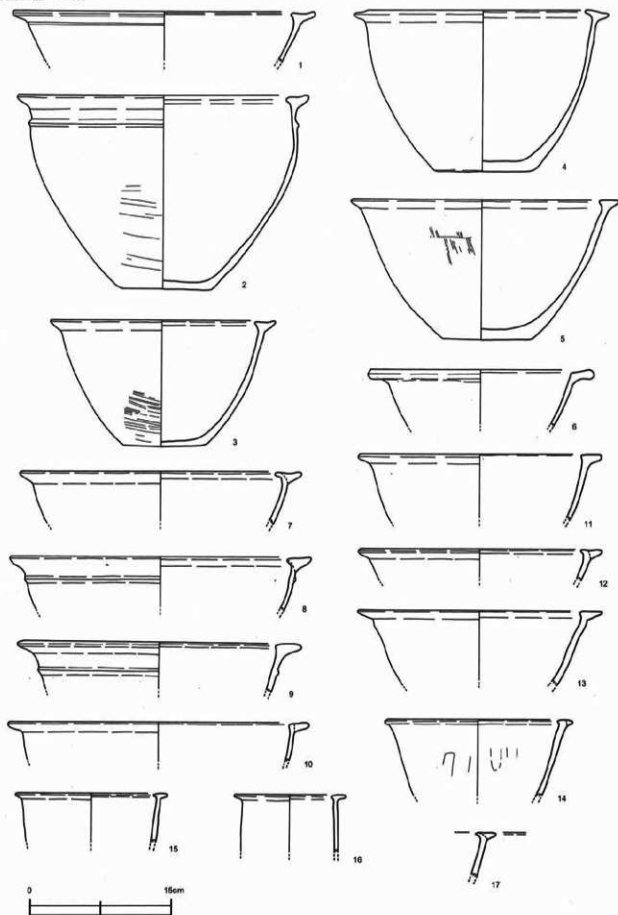


鉢型土器 II類c



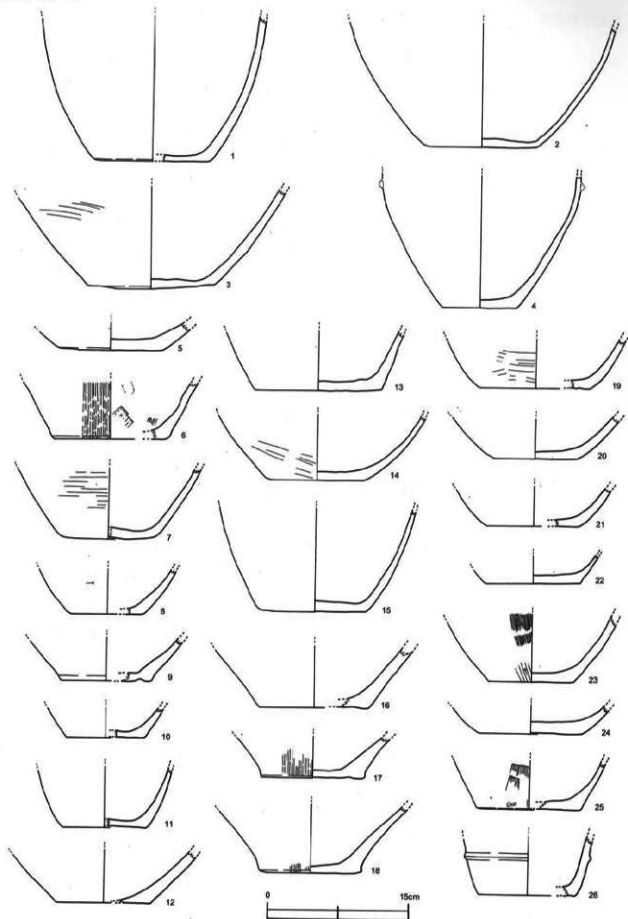
第51図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

鉢型土器 Ⅲ類



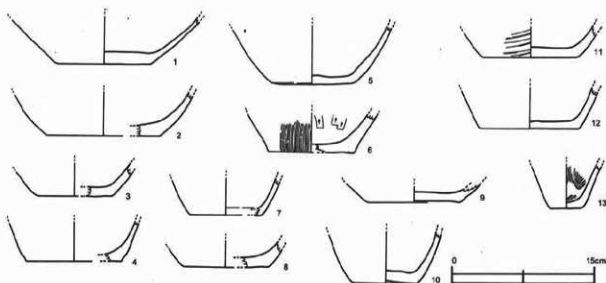
第52図 IB河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

鉢型土器底部



第53圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

鉢型土器底部



第54図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

鉢形土器Ⅲ類

Ⅲ類 (第52図) 口縁部はほぼ直立して「T」字形になり、内容が張り出す。口縁部の上端は平坦かやや凹むもの、外側に大きくはね上げるものがある。外側口唇部は丸みを持っている。口縁下には一条の形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持ち、甕形土器Ⅲ類bの口縁部と同じ形態となるが、浅鉢形となり底部は平底となる。内、外面ともで調整が多い。口縁部の直径は15cmから30cm前後で、遺物の量としては比較的少ない。

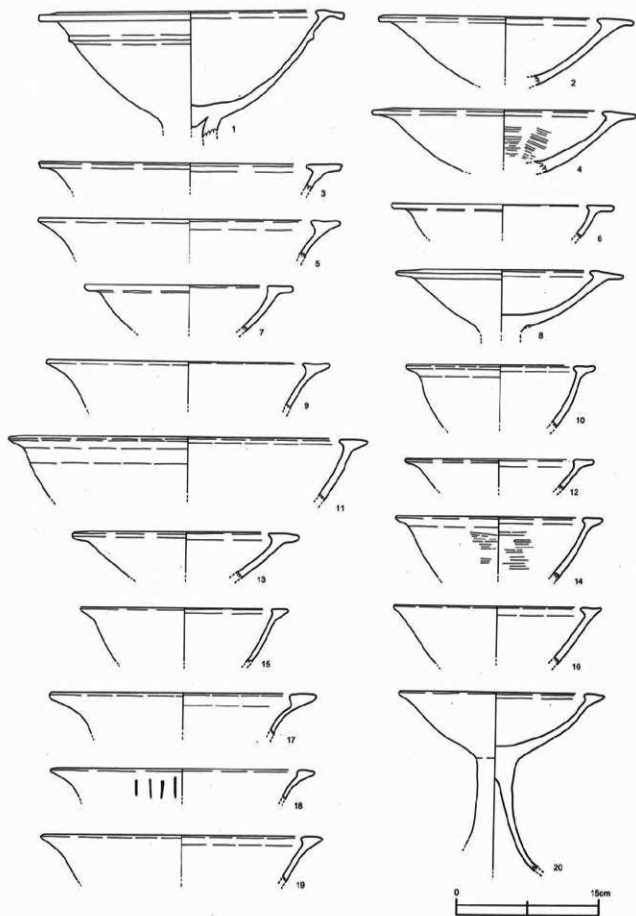
碗形土器 (第57図)

碗形土器はわずか5点のみの出土。底から丸く立ち上がり、厚手と薄手の2種類がある。外面は刷毛目調整である。口縁部の直径は15cm前後、高さ5cmで、遺物の量としては少ない。

高杯 (第55・56図)

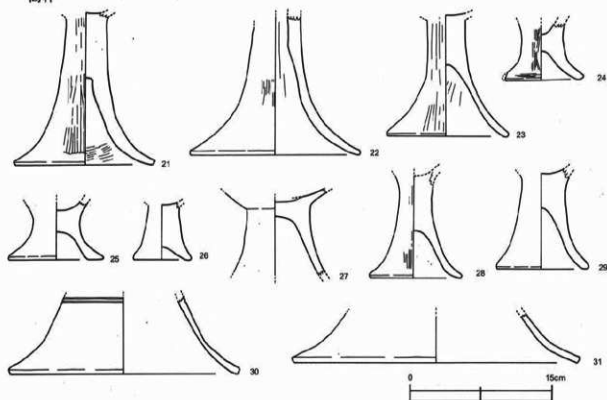
杯底から口縁にかけて外方に大きく開き、口縁部は「T」字形になり、内容がわずかに張り出すものと、大きく張り出すものがある。口縁部の上端は平坦かやや凹むもの、外側にわずかにね上げるものがあり、口唇部は丸みを持つものとやや凹むものがある。口縁下には、形骸化した三角形の貼り付けの突帯を持つもの、持たないものがわずかではあるが混じっている。脚部は長大化し1点ではあるが沈線を巡らすものと、短脚で外方に広がり端部は丸くつくるものがある。杯部に暗文が施されるものもあり、内外面は全体にへら磨きによって

高杯



第55図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

高杯



第56図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

調整される。脚部の外面は縦方向にやや荒い刷毛目調整を施し、内面は横方向に刷毛目調整を施している。口縁部の直径は20cm前後のものと、30cm前後のもの2種類があり、大型の高杯が多く、小型の高杯は少ない。遺物の量としては比較的多い。

器台 (第58図)

器台は形態によって2種類に分類できる。

器台Ⅰ類

両端とも大きく外方に開き、鼓状となる。上端と下端の直径は10cmから11cmとほぼ同じか、下端がわずかに広い。外面は縦方向の細かな刷毛目調整、内面はなでで調整している。口縁部の直径は11cmから12cm前後、高さで12cmから13cm前後で、遺物の量としては多い。

器台Ⅱ類

両端ともわずかに外方に開き、円筒状となる。上端と下端の直径は7cm前後と、両端ともほぼ同じで、器壁が厚手につくられている。外面は縦方向の細かな刷毛目調整、内面はなでで調整している。口縁部の直径は7cm前後、高さで12cmから13cm前後で、遺物の量としては少ない。

支脚 (第59図)

両端とも外方に開かず、ほぼ円筒状となるものと、土状で上端を窪ませるものがある。
上端の直径は4 cmから7 cm前後、下端の直径は5 cmから8 cm前後と、下端の直径が大きくなり、器壁が厚手につくられている。外面は縦方向の細かな刷毛目調整となで調整を、内面はなで調整している。口縁部の直径は4 cmから7 cm前後、高さで1.2 cmから1.3 cm前後で、遺物の量としては少ない。

蓋 (第60図)

蓋は形態によって3種類に分類できる。

蓋Ⅰ類 (第60図)

いずれも口縁部の破片のため、全体は不明であるが、肩部が丸みを持って口縁部に移る、口縁部は厚みを持った「T」字形になり、口縁部の上端は平坦かやや凹に仕上げる。口唇部は外側に刻目を施している。内、外面ともなで調整が多い。口縁部の直径は3.4 cm前後で、遺物の量はわずかである。

蓋Ⅱ類 (第60図)

頂部からゆるやかに胴部、口縁部に移る。口縁部は角張ってつくられ一部はね上げのものや、凹面に仕上げるものもある。内、外面ともは斜めや横方向のやや荒いはけ目調整が多い。口縁部の直径は3.0 cmから4.0 cm前後で、遺物の量はわずかである。

蓋Ⅲ類 (第60図)

つまみ部分は厚味を持ち、ゆるやかに裾が開く。頂部はやや下がり底になるものが多く、頂部付近で強くすばまりながら、口縁部に向かってゆるやかに開く。外面は縦方向の細かなはけ目調整が多く、内面はなで調整が多い。口縁部の直径は不明であるが、つまみの直径は5 cm前後で、遺物の量は比較的多い。

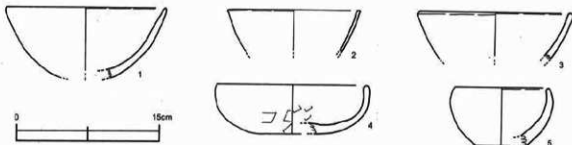
丹塗土器 (第61・62・63図)

丹塗土器は甕形土器、壺形土器、高杯、筒形器台がある。

甕形土器 (第61図)

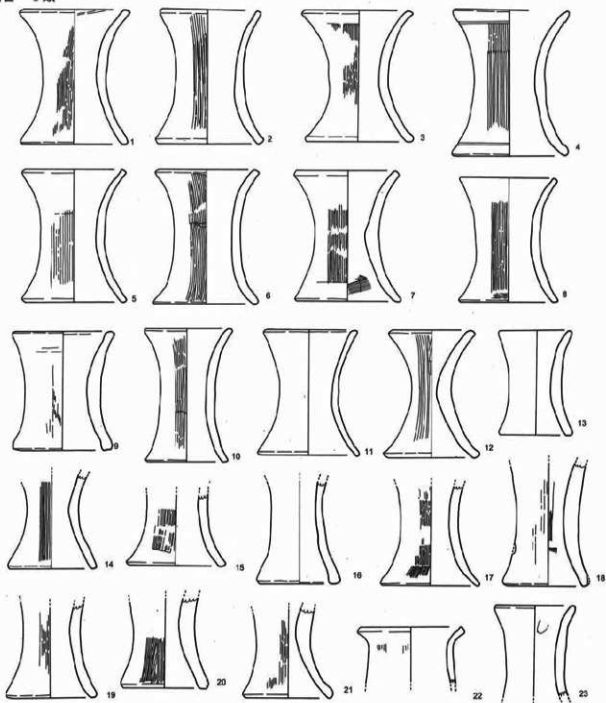
外方に大きく開く短い口縁で、端部は丸くつく。全体に薄い作りで、肩から胴にかけてあまり張り出さない。内、外面ともへら磨きで調整され、内、外面とも丹塗がのこる。口縁部の直径は1

碗型土器

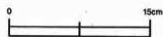
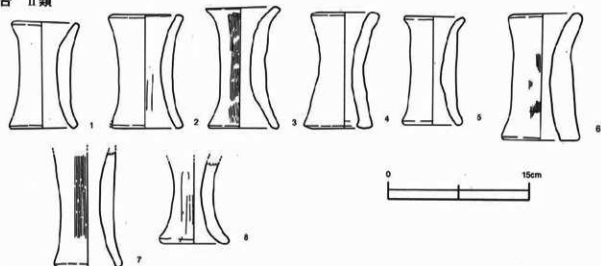


第57図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

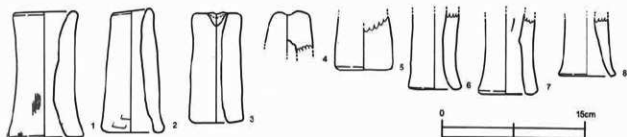
器台 I類



器台 II類



第58図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)



第59図 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

5 cm前後で、遺物は3点のみである。

壺形土器 (第62図)

口縁部が直立しながら外方に開く短い口縁で、肩は大きく球形に張る。口縁部と肩部の境には三角形の貼り付け突帯がある。内、外面ともへら磨きで調整され、外面の口縁部と肩部に丹塗がのこる。口縁部の直径は22 cm前後。大きく張った球形の胴部から、平底に続く。薄いつくりで内、外面ともへら磨きで調整され、外面の胴部と底部に丹塗がのこる。遺物は2点のみである。

高杯 (第63図)

杯部の形態によって2種類に分類できる。

高杯Ⅰ類

口縁部は碗状になり、口唇部は丸みを持つ。口縁部の直径は16 cmで脚部に続く。調整は不明であるが、内外面に丹塗が良く残っている。遺物は1点のみである。

高杯Ⅱ類

口縁部は「T」字形になり、内唇が張り出す。口縁部の上端は平坦で、口唇部は丸みを持つ。杯部と脚部の境には、形骸化した台形の貼り付けの突帯を持つものもわずかではあるが混じっている。脚部は長大化し1点ではあるが沈線を巡らすものと、短脚で外方に広がり端部は丸くつくるものがある。杯部に暗文が施されるものもあり、内外面は全体にへら磨きによって調整される。脚部の外面は縦方向にやや荒い刷毛目調整を施し、内面は横方向に刷毛目調整を施している。口縁部の直径は26 cmから、34 cm前後のものが多い。大型の高杯が多く、小型の高杯は少ない。遺物の量としては比較的多い。

土製品 (第64図)

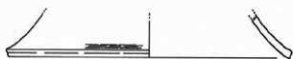
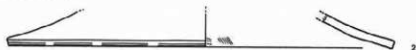
投弾 (第64図)

旧河川や溝から2点出土した。いずれも手捏によって紡錘形に整形している。長さ4.5 cm—

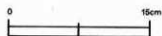
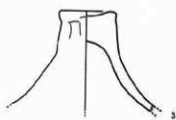
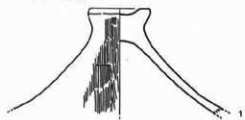
蓋 I 類



蓋 II 類

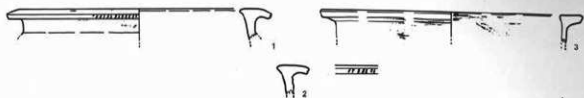


蓋 III 類

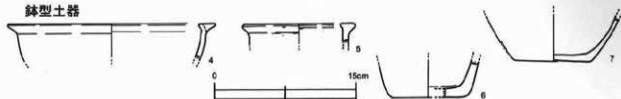


第 60 圖 旧河川 (SD01) 出土土器 (1/4)

甕型土器



鉢型土器



第61図 旧河川 (SD01) 出土丹塗土器 (1/4)

5. 3 cm、直径2. 3 cm・2. 6 cm。

紡錘車 (第64図)

旧河川からわずか1点出土した。直径4. 0 cm、厚さ1. 3 cm。

小型土器 (第64図)

旧河川から出土した。甕形土器、壺形土器、碗形土器、高杯のミニチュアである。いずれも手捏によってつくられている。

杓子 (第64図)

旧河川から4点出土した。杓子の取っ手部分の破片である。

石器 (第66～80図)

旧河川や土壌、溝、Pitから多量の石器が出土している。石器の種類も多く、武器として石剣、石戈、加工具として大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧 (挟入石斧)、扁平片刃石斧、狩猟具として石鏃、紡具としての紡錘車、収穫具として石庖丁、調理具として石皿、磨石、凹石と研磨するための砥石が発見された。この他、黒曜石片、サヌカイト片も多く発見されている。

石剣 (第66図4・7)

旧河川、土壌から4本出土した。いずれも破片である。大型のものと(4・5)小型のもの(6・7)があり、いずれもで粘板岩で作られている。(4-6)は剣中程、(7)は基部分である。上端は欠損しているが、(5)の下端は擦り切りの痕が残る。断面は丸みを持った菱形となる。

石戈 (第66図)

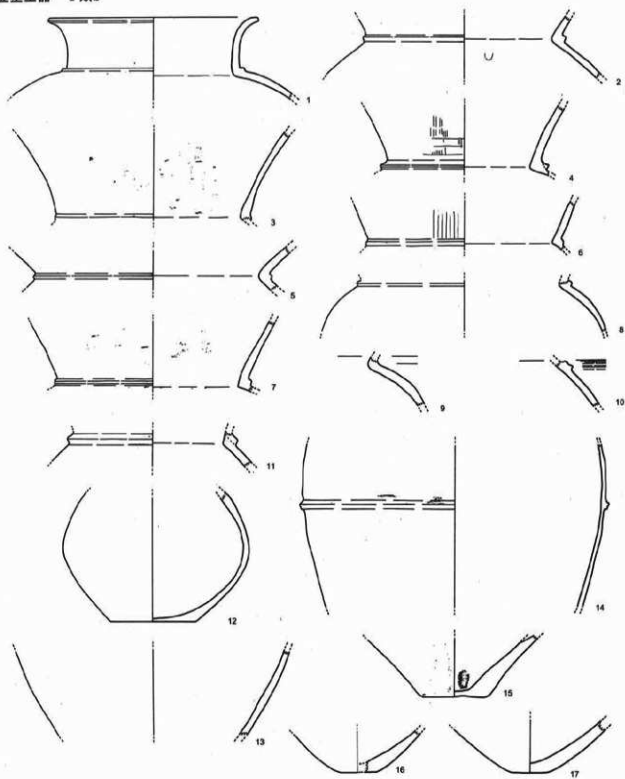
Pit、旧河川から3本出土した。(2・3)は切先部分の破片、(1)は基に近い部分の破片で、穿孔が2箇所にある。いずれもで粘板岩で、断面は丸みを持った菱形となる。

石斧

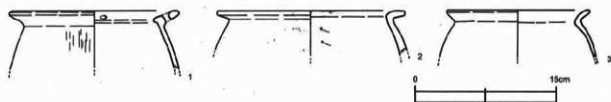
大型蛤刃石斧 (第67・68図)

旧河川や土壌、Pitから4本出土した。大型蛤刃石斧の製品 (第67図2・第68図1. 2.)

壺型土器 I類b



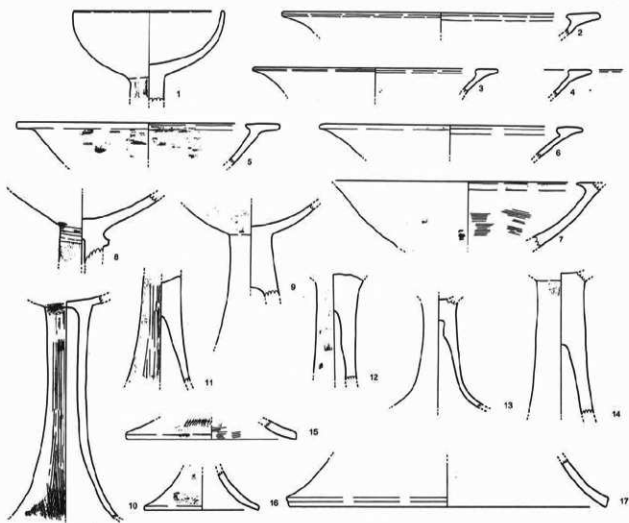
無頸壺型土器



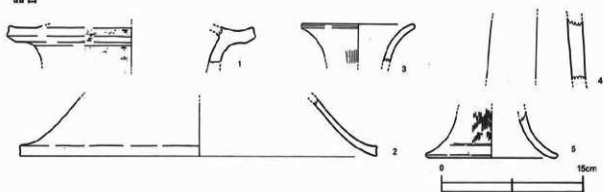
第62図 旧河川 (SD01) 出土丹塗土器 (1/4)

高杯Ⅰ類

高杯Ⅱ類



器台



第63図 旧河川 (SD01) 出土丹塗土器 [1/4]



第64図 旧河川 (SD01) 出土土製品 [1/2]

と未製品第67図(3)で、第67図(2)は完形品、未製品は研磨を残すのみである。安山岩製。

柱状片刃石斧 (挟入石斧) (第67図1・68図)

旧河川や、溝から13本出土した。すべて未製品で、挟りを造り出していないもの(3, 6, 7, 8, 11), 片刃を造り出していないものや研ぎ出していない(第67図1・3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12)がある。いずれもで粘板岩で作られている。

扁平片刃石斧 (第67図)

旧河川や溝、土壌から7本が出土した。長さ7cm前後、幅1.8cm-2.5cmの片刃石斧と長さ4cm-5cm前後、幅1.5cm-2.5cmの小型のみ状の片刃石斧があるが、ほぼ完形品は2本のみで他は破片である。いずれもで頁岩で作られている。

石鏃 (第69・70図)

堅穴住居、土壌、Pit、旧河川から磨製石鏃2本、黒曜石製打製石鏃29本、サヌカイト製打製石鏃15本が出土した。製品と未製品があり、大きさも長さ1.7cm-2.5cm、幅1.5cm-2.0cmの小型品と、長さ3cm-5cm、幅2.0cm-3.0cmの大型品がある。わずか1点ではあるが両側に挟りをもつものもある。

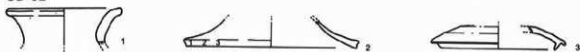
紡錘車 (第67図)

土壌、旧河川から2個出土した。いずれも石製品である。直径4.8cm、厚さ0.6cmのものと直径5.5cm、厚さ0.6cmがあり、いずれも結晶片岩製で中央に穿孔がある。

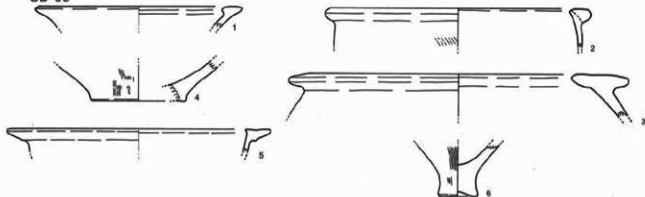
石応丁 (第67図・第71図)

土壌から1個、Pitから1個、旧河川から23個出土した。石応丁は製品と未製品があり、製品は全て破片である。製品17個、穿孔済み未製品3個、荒削段階の未製品5個で、石材は製品17個の内粘板岩製10個、輝緑凝灰岩製3個、結晶片岩製4個、穿孔済み未製品3個、荒削段階の未製品はすべてが結晶片岩製である。

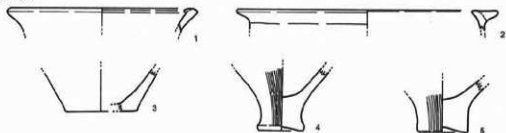
SD-02



SD-03



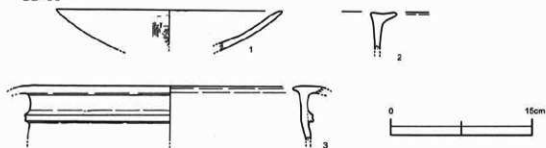
SD-04



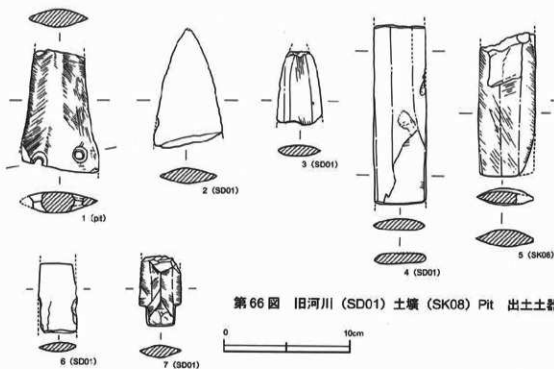
SD-05



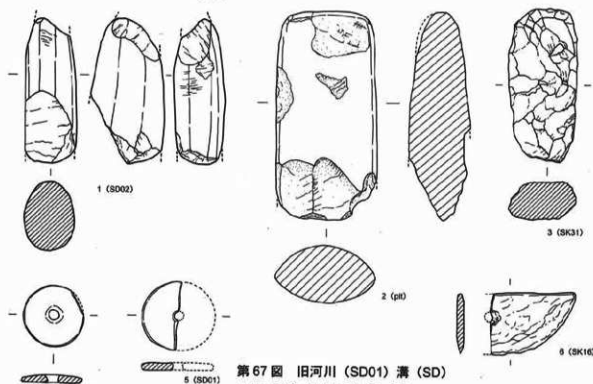
SD-03



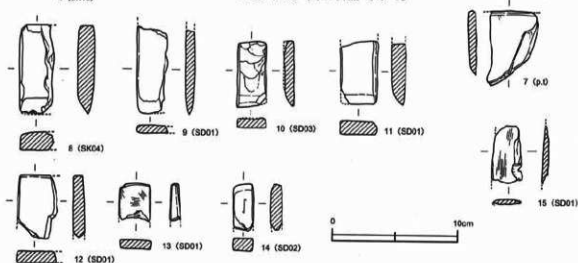
第65図 溝 (SD02・03・04・05) 出土土器 [1/4]

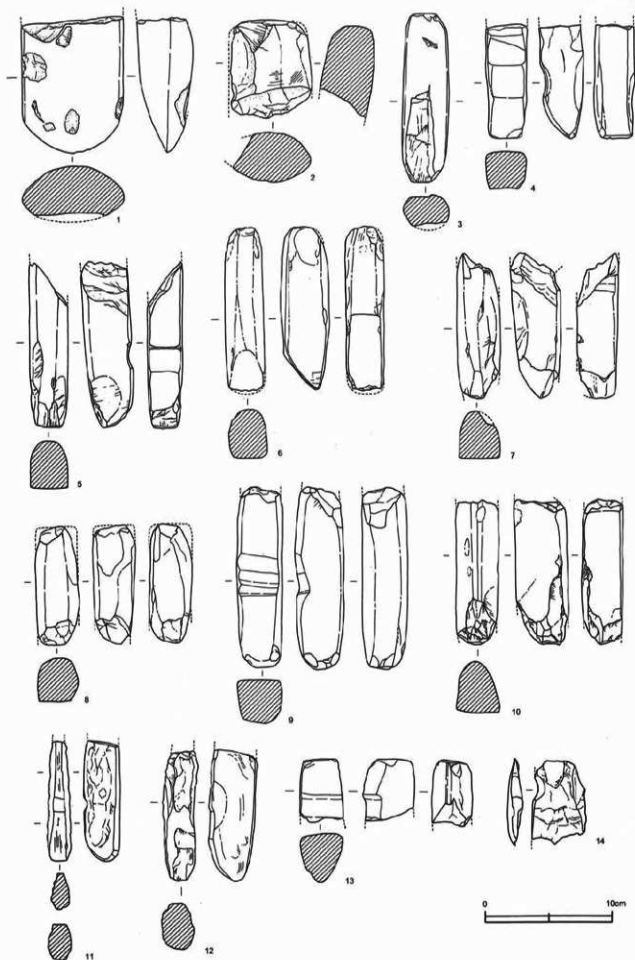


第66図 旧河川 (SD01) 土壌 (SK08) Pit 出土土器 (1/3)

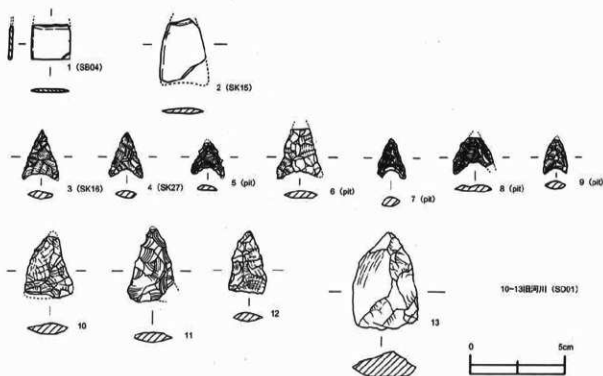


第67図 旧河川 (SD01) 溝 (SD) 土壌 (SK) 出土石器 (1/3)





第68圖 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/3)



第69図 旧河川 (SD01) 竪穴住居 (SB) 土壌 (SK) 柱穴 (Pit) 出土石器 [1/2]

石皿 (第72・73図)

旧河川や土壌、溝、Pitから多量に出土した。大きさや形も様々で、中央部が凹むものもあり、一部のみ図示した。いずれも安山岩製である。

磨石 (第74～77図)

旧河川や土壌、溝、Pitから多量に出土した。大きさや形も様々で、円形のものが多く、一部のみ図示している。いずれも安山岩製である。

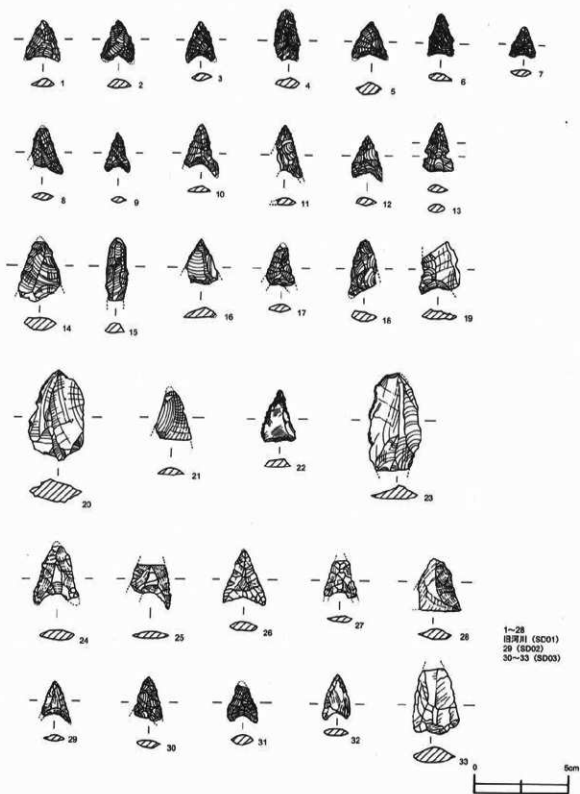
凹石 (第78図)

旧河川や土壌、溝、Pitから出土している。石皿、磨石ほど多量に出土していない。大きさや形も様々で円形のものが多く、中央部の片面または両面に小さな凹みをつけている。いずれも安山岩製である。

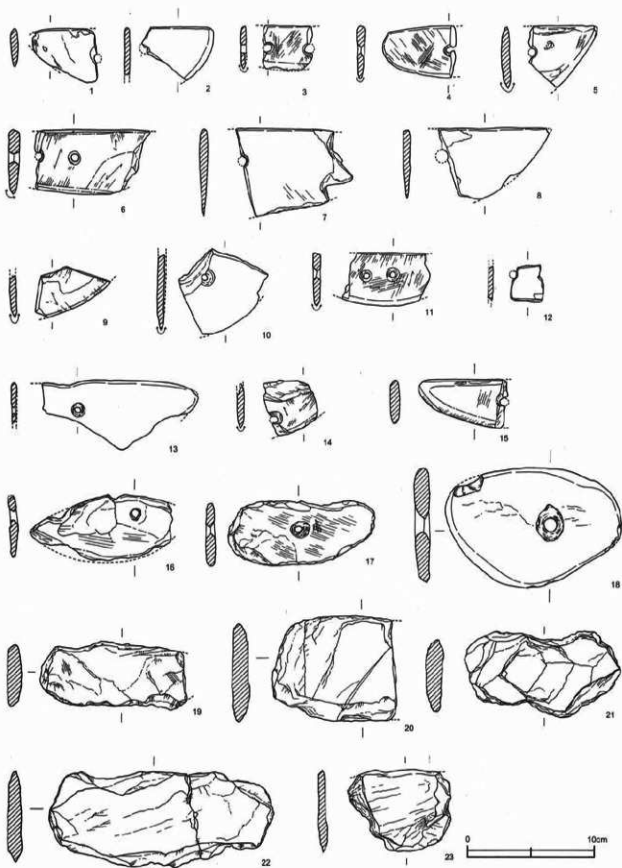
砥石 (第72・79・80図)

旧河川や土壌、溝、Pitから多量に出土した。大きさや形も様々で完形品は少ない。

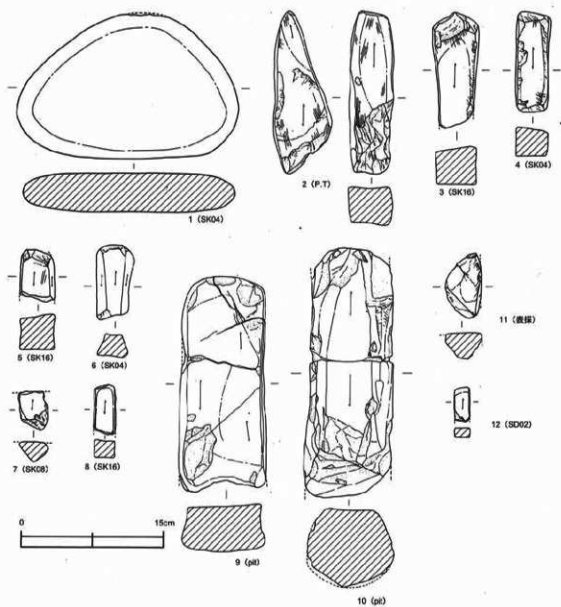
大型の砥石は長さ26cm以上、幅10cm前後、小型の砥石は長さ2.5cm、幅1.5cmある。断面も方形、長方形、多角形(5角形、6角形)があり、4面から6面まで使用されている。いずれも砂岩製である。



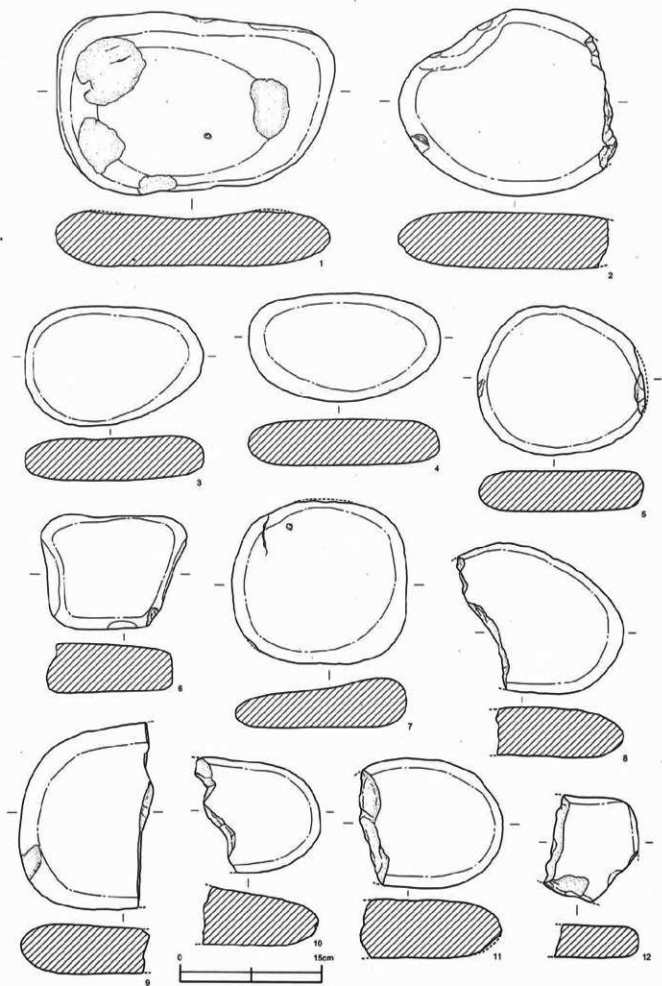
第70図 旧河川 (SD01) 溝 (SD02・03) 出土石器 (1/2)



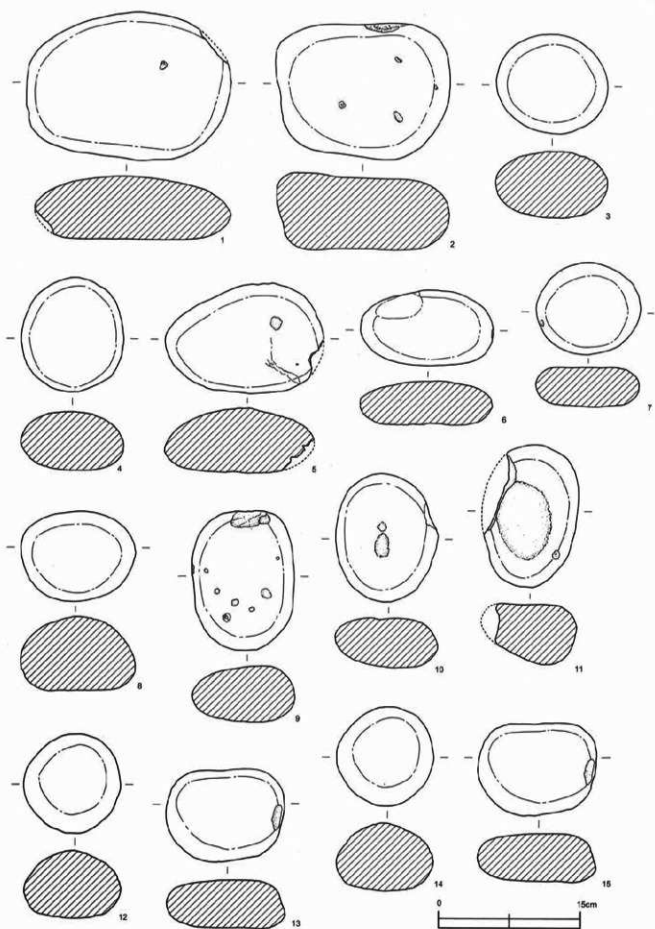
第71図 旧河川 (SD01) 出土石製品 (1/3)



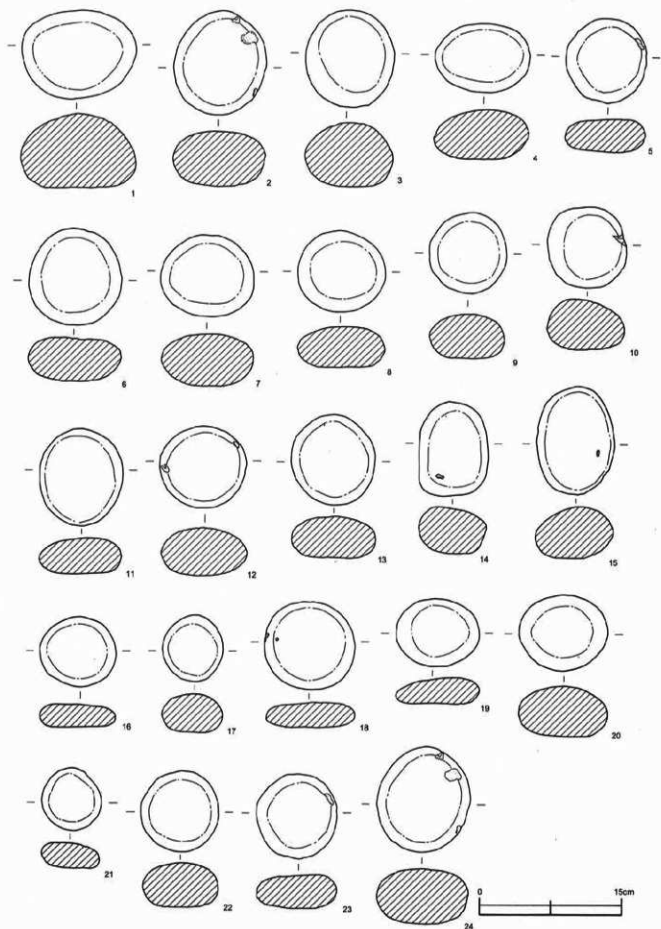
第72図 土壌 (SK) 溝 (SD) Pit 表探出土石器 [1/4]



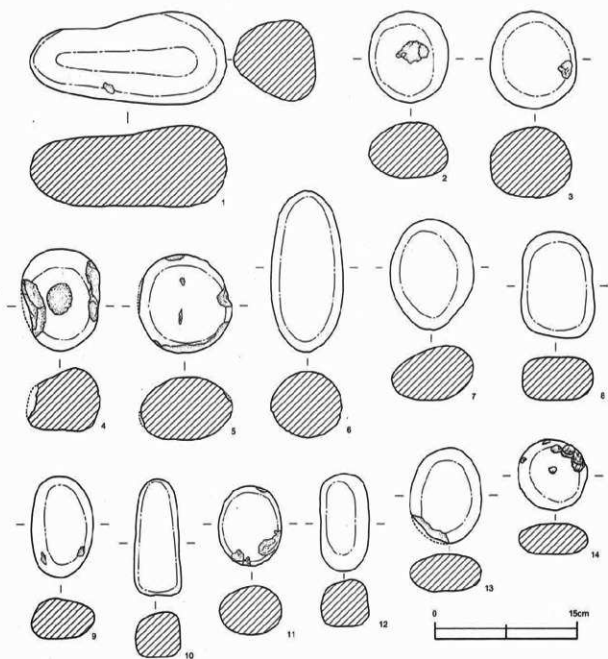
第73図 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4)



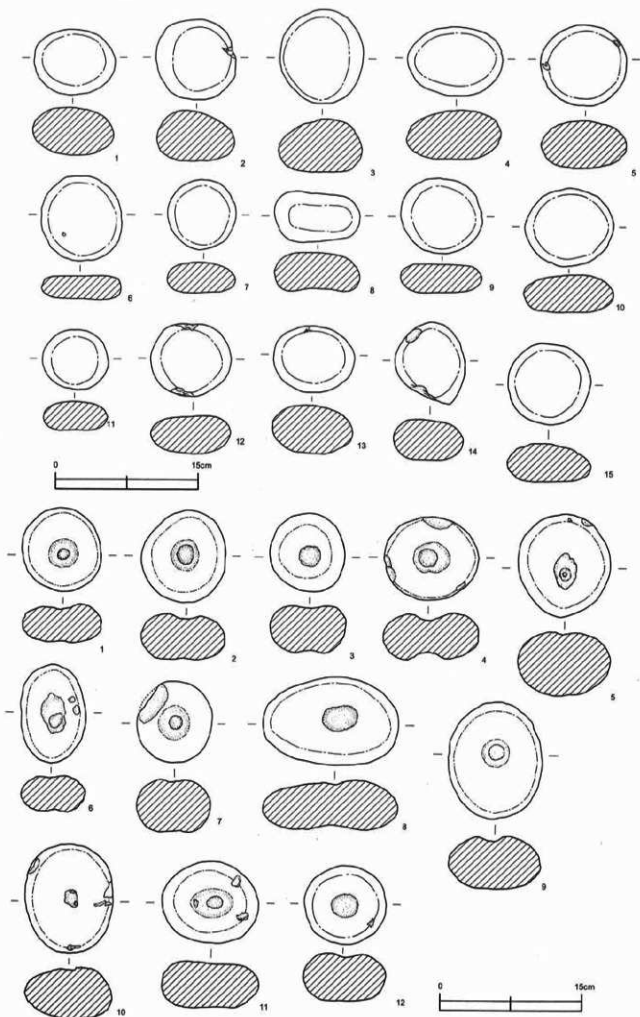
第74図 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4)



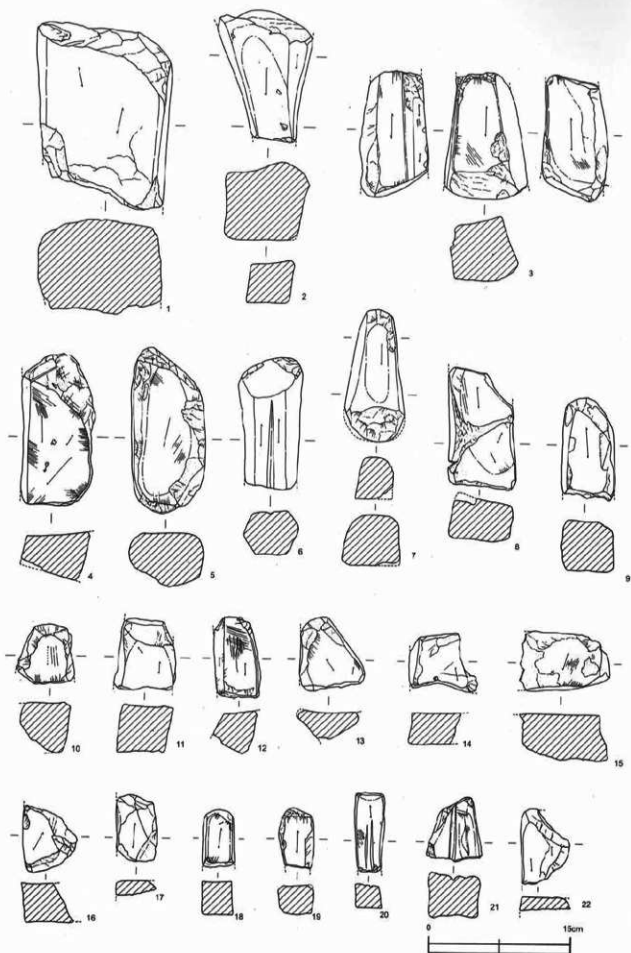
第75圖 旧河川 (SD01) 出土石器 [1/4]



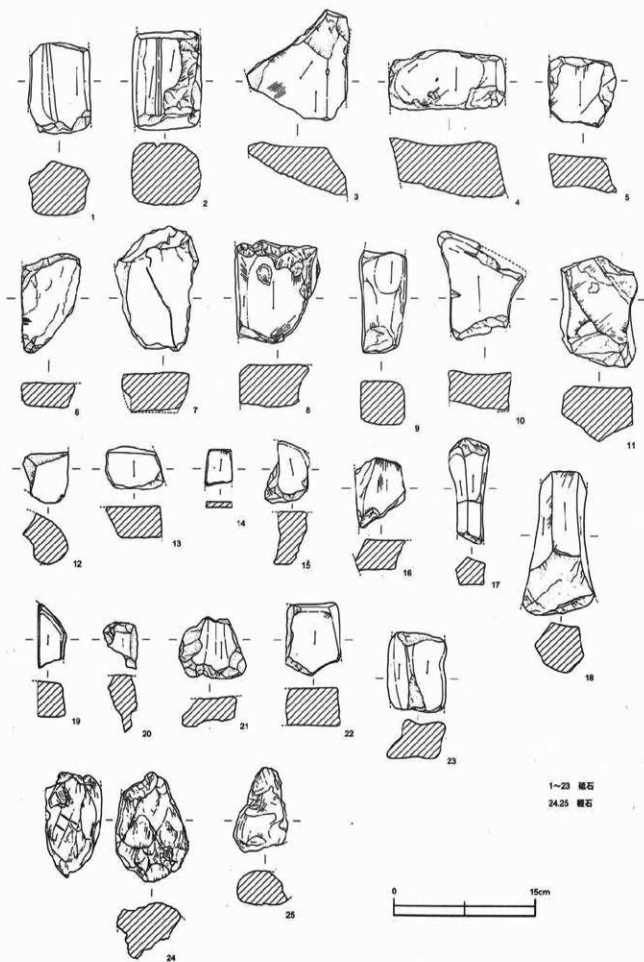
第76図 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4)



第77図上 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4) 1~15 第78図下 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4) 1~12



第79图 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4)



第80図 旧河川 (SD01) 出土石器 (1/4)

5・まとめ

1・集落について

高島遺跡の発掘調査によって弥生時代の堅穴住居、土坑が溝（旧河川）の西側から発見されたが、これまで、高島遺跡周辺の調査では、北西側400mにある赤土遺跡と西側200mにある熊野遺跡がいずれも集落の中心と考えられている。今回の調査では旧河川の東側から遺構は発見されず、また、旧河川から多量の土器、石器が出土しているが、遺物のほとんどが旧河川の西側から集中して出土しているため、旧河川が赤土遺跡、熊野遺跡から続く集落の東端と考えられる。西端は国道3号線の100m程西側で弥生式土器片が採集されており集落がこの付近まで続くものと思われる。北端は100m北の川崎病院付近で壺や高杯が発見されているが、その北側については圃場整備前の試験調査で遺構、遺物は全く発見されなかったため、北端は川崎病院付近と考えられる。南端については不明な点が多いが、熊野遺跡の西南で墳墓群が発見されており、集落の範囲を推定すると南北約250m、東西600mで、面積も約15ヘクタールとなり大規模な集落となる。

2・旧河川（SD01）について

調査区の北側から南側にかけて幅20mから25mの旧河川が検出された。旧河川の上層のⅠ層、Ⅱ層からは多量の土器や石器が出土しており、下層からはほとんど遺物は出土していない事や、Ⅱ層部分に護岸が構築されていたため、Ⅰ層、Ⅱ層時に旧河川が利用されていたことが判明した。出土遺物の時期も西側に広がる集落の時期とほぼ同時期であり、集落で使用していた土器や石器を旧河川に廃棄したものと思われる。また、旧河川に堆積している粘土層は薄く、長期間常時に流れていたとは考え難く、また、遺物も磨滅が無いなど、旧河川は増水時のみ大きく流れ、日常はわずかの水量を流すだけの川ではないかと思われる。

3・出土土器について

旧河川を中心に多量の遺物が出土している。特に土器、石器がほとんどである。特に土器が多量に出土したが、壺形土器に大きな特徴があるため、壺形土器を中心に形式別に分類を試みた。

壺形土器Ⅰ類をa、b、cの3つに区分した。いわゆる亀ノ甲タイプの刻目突帯文系の土器で口縁や突帯に施す刻目が消滅し、突帯のかわりに沈線を施したりする。

壺形土器Ⅱ類をb、cの2つに区分した。Ⅰ類に続くと考えられ、口縁部の外面の粘土帯が肥大し、沈線にかわって三角形の貼り付けの突帯を持つ。

壺形土器Ⅲ類をa、b、c、dの4つに区分した。Ⅱ類に続くと考えられ、口縁部の形が「く」、「T」字形になる。口縁部下に三角形の貼り付けの突帯を持つ。

このことから、壺形土器Ⅰ類は藤尾慎一郎氏（註1）の分類のⅢ類に相当し、城ノ越式土器並行の弥生時代中期初頭に、壺形土器Ⅱ類を中期前半、壺形土器Ⅲ類を中期中頃と考えられる。

註1 藤尾慎一郎「弥生時代前期の刻目突帯文系土器（亀ノ甲タイプの再検討）」

九州考古学 第59号 1983

遺跡試料花粉分析結果報告書

応用地質(株)九州支社
松山尚典

分析方法

花粉化石の抽出は、中村(1967)のアセトリシス法に塩化亜鉛水溶液による重液分離を加えた次の方法でおこなった。

1. 各試料から約5gをとり、10%水酸化カリウム水溶液を加え、沸騰している湯煎器中で15分間加熱する。
2. 水洗処理。
3. 塩化亜鉛水溶液(比重1.7~1.8)を用いた重液分離によって花粉化石を抽出する。
4. 抽出した花粉化石を酢酸で脱水後、無水酢酸(90%)と硫酸(10%)の混酸を加え湯煎器で5分間加熱する。
5. 酢酸と水で洗浄する。
6. グリセゼリーで封入し、プレパラートを製作する。
7. 試料1点あたり、花粉化石の総数が200個以上になるまで検鏡・同定する。

結果

今回の試料から検出された花粉・胞子化石は、数がきわめて少なく、1プレパラートあたり、多いもので10数個あり、多くのプレパラートでは全く検出されなかった。しかもそれらは、きわめて保存が悪く、シダ類胞子は比較的良好なもの、花粉化石は同定に耐えるものはほとんどない(写真参照)。

試料と花粉化石検出状況は表1の通りである。

考察

花粉分析によって古植生を復元する際には、一般に1試料あたり、樹木花粉化石を最低200個同定計算して、そのあいだに同定された花粉の構成比をもとに古植生を推定する。

検出される樹木花粉が200個未満の時は、推定された古植生の信頼性は低くなると考えられている。今回の場合のように、花粉・胞子が極端に少ない場合には、古植生を推定することは不可能である。

花粉は一般に風化に強く、シルトサイズ以下の堆積物では多くの場合保存されるが、酸素の供給が多い環境では分解する。今回の試料は、現地を観察する機会がなかったので推測の域を出ないが、試料中に現世植物の細かい根が多く混入しているものが多いことから、表層に近い土壌(あるいは、古土壌)の試料が多いのではないと思われる。今回の試料で花粉化石の存在がきわめて悪いのは、花粉が堆積した環境が水中ではなく、地表であったことから、分解が速かったためであろうと考えられる。

文献

中村純(1967)花粉分析・232p・古今書院・東京

地区名	試料番号	土層名	試料状態	花粉・胞子化石検出状況
高島	SD01第2地点	I	黒褐色粘土	検出せず
		II	黒褐色粗粒混じり粘土	検出せず
		III	黒褐色粗粒混じり粘土	シダ類胞子数個
		IV	黒褐色粘土 根管を含む	常緑カシ類と思われる花粉数個とシダ類胞子数個を検出

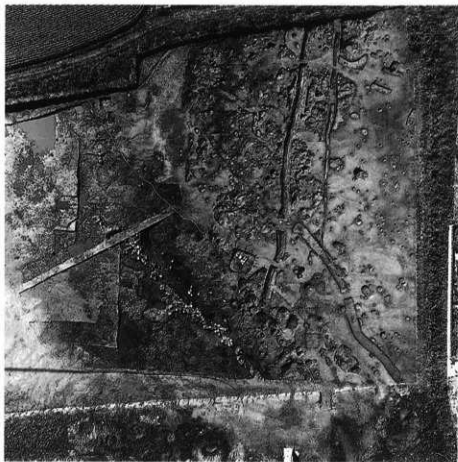
圖 版



1 遺跡全景（北より）



2 遺跡全景（東より）



1 遺跡西側全景（上空より）



2 遺跡西側全景（北東より）



2 竖穴住居 (SB01) 石焼出土



1 竖穴住居 (SB01)



4 竖穴住居 (SB03)



3 竖穴住居 (SB02)



1 高島遺跡発掘風景（南西より）



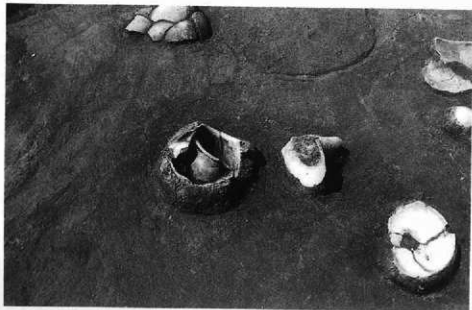
2 竪穴住居（SB04）



2 豎穴住居 (SB04) 土器出土



1 豎穴住居 (SB04) 土器出土



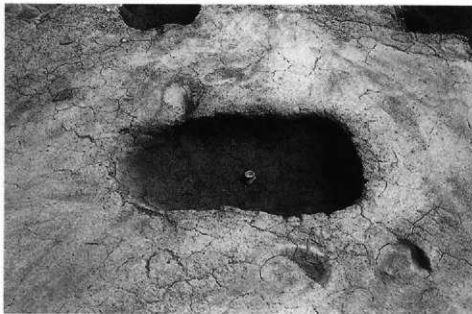
4 豎穴住居 (SB04) 土器出土



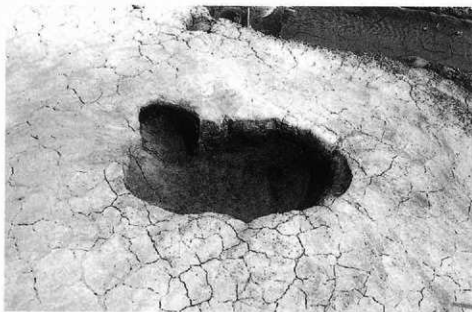
3 豎穴住居 (SB04) 土器出土



2 土坑 (SK02)



1 土坑 (SK01)



4 土坑 (SK03)



3 土坑 (SK04)



2 土 壙 (SK06・SK38)



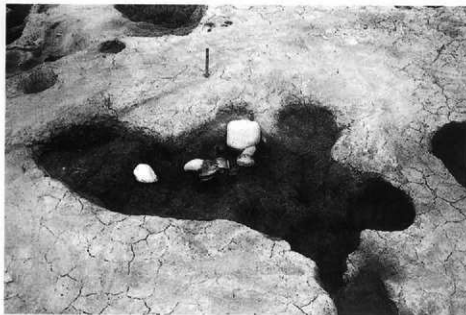
1 土 壙 (SK05)



4 土 壙 (SK09)



3 土 壙 (SK08)



2 土 坑 (SK11)



1 土 坑 (SK10)



4 土 坑 (SK13)



3 土 坑 (SK12)



2 土 坑 (SK15)



1 土 坑 (SK14)



4 土 坑 (SK18)



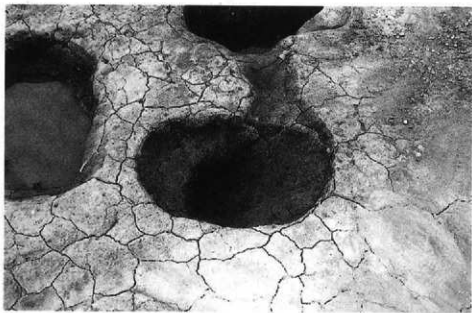
3 土 坑 (SK17)



2 土 壙 (SK20)



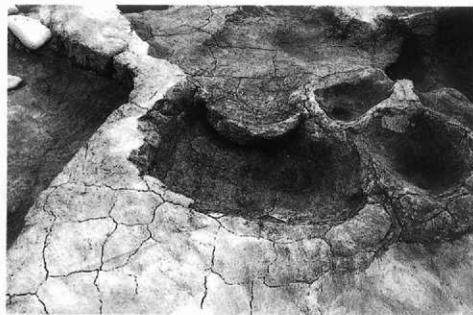
1 土 壙 (SK19)



4 土 壙 (SK22)



3 土 壙 (SK21)



2 土壤 (SK24)



1 土壤 (SK23)



4 土壤 (SK26)



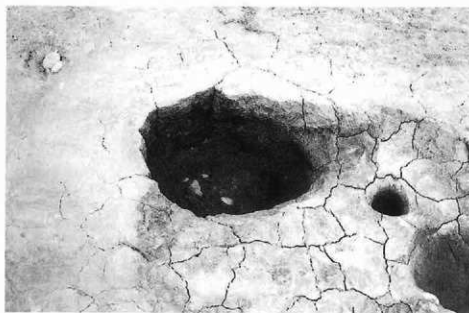
3 土壤 (SK25)



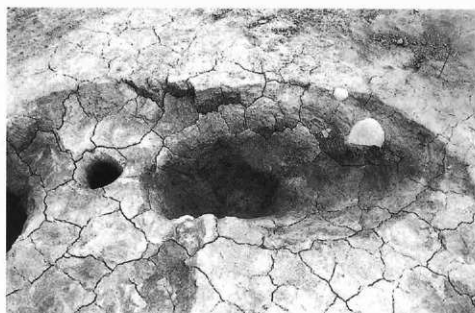
2 土壤 (SK27)



1 土壤 (SK23·26)



4 土壤 (SK32)



3 土壤 (SK31)



1 土 坑 (SK34)



2 Pit



1 遺跡全景（上空南より）



2 旧河川（SD01）発掘作業風景（西より）



1 遺跡全景（上空東より）



2 旧河川（北東より）



2 旧河川 (SD01) 石刻出土



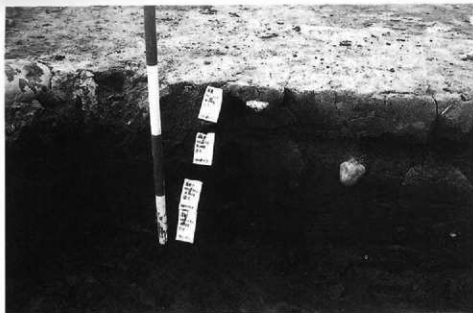
1 旧河川 (SD01) 柱状片刃石斧 (挟入石斧) 出土



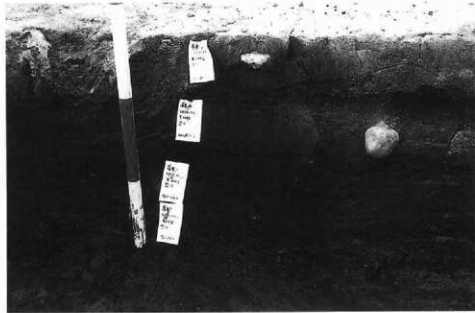
4 旧河川 (SD01) 護岸



3 旧河川 (SD01) 護岸



2 旧河川 (SD01) 花粉分析サンプリング



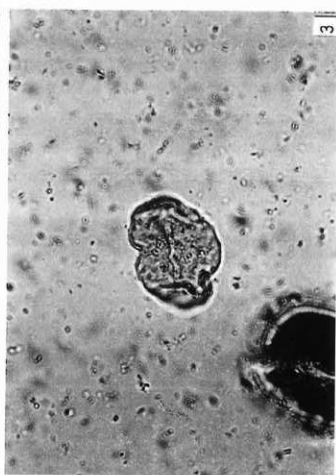
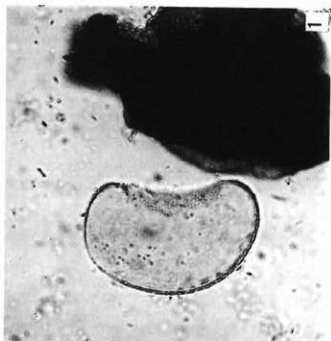
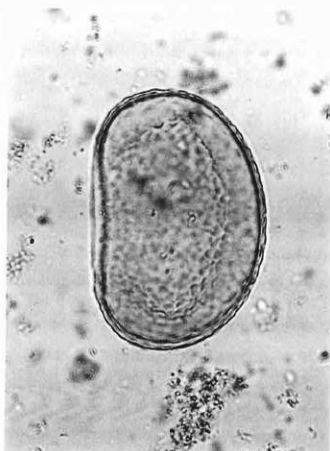
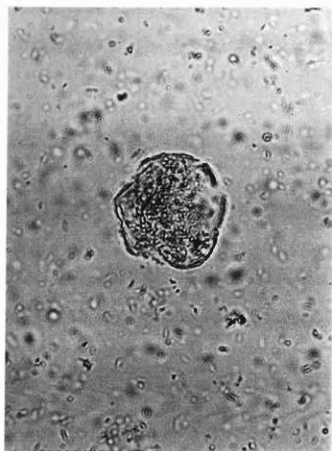
1 旧河川 (SD01) 花粉分析サンプリング



4 旧河川 (SD01) 花粉分析サンプリング



3 旧河川 (SD01) 花粉分析サンプリング



写真説明 (倍率は900倍)

1. 単溝粒型シダ類胞子 (高島SD-01地点Ⅲ)
2. 同定不能花粉 (高島SD01地点)
3. 同定不能花粉 (高島SD01地点)
4. 単溝粒型シダ類胞子 (高島SD01地点)

報告書抄録

ふりがな	たかしまいせき							
書名	高島遺跡							
副書名	福岡県八女市大字津江字高島所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	赤崎敏男							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町647 TEL0943-23-1111							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
高島遺跡	福岡県 八女市大字津江 字高島	402109		33°12'40"	130°34'35"	970619 ~970930	約 3,500m ²	老人保健 施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高島遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居4 土壇38 溝(旧河川)1 柱穴多数 溝3		弥生式土器多数 石器多数			

高島遺跡

八女市文化財調査報告書

第52集

発行 八女市教育委員会

八女市大字本町647

印刷 東兄弟印刷

八女市大字祈禱院563